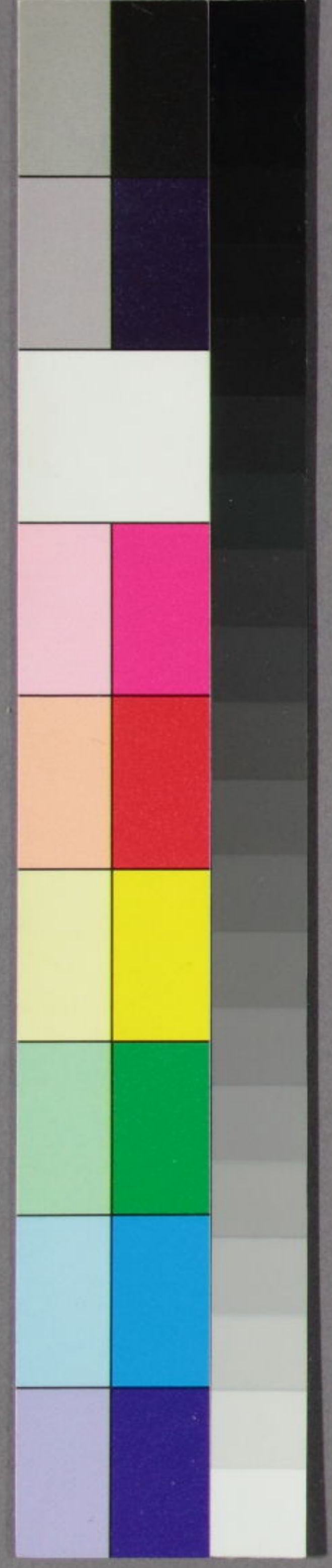
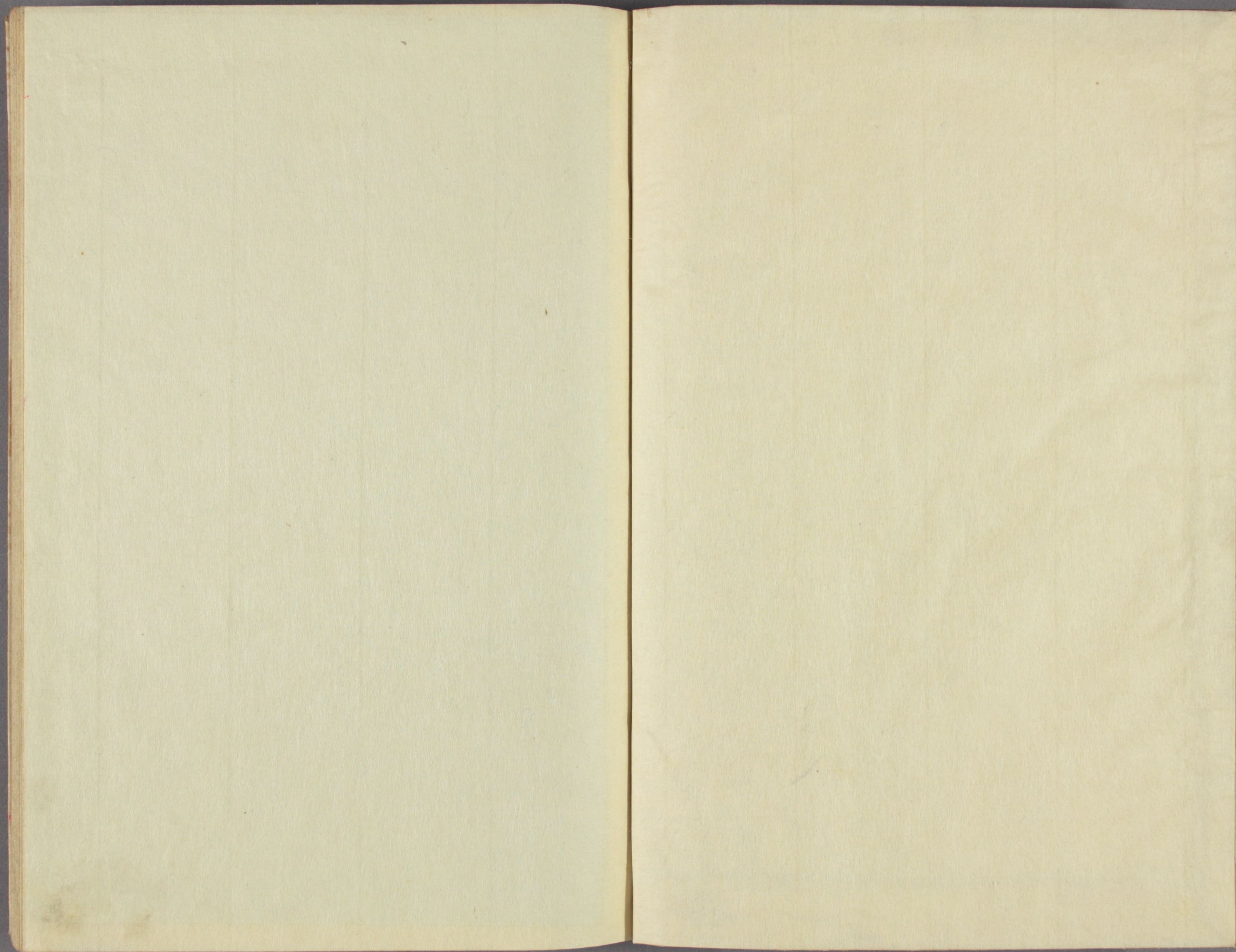


燕石
十種
吾妻錦繪考

三輯
六

1冊4
679
26





大和繪師浮世繪の考

吾妻錦繪の考

岩佐又兵衛之傳 土佐又兵衛浮世又兵衛 大津又平、畧傳、系譜	菱川師宣之傳 英一蝶、山鳥一蝶之考 淺妻船四季之繪跋	西川祐信之傳 橋守國之傳 雛屋立圃、時繪師源齋	鈴木春信之傳 懷月堂 川枝豊信	富川房信 阿江	月岡丹下之傳 一筆齋文調	柳文調 鳥山石燕	細田榮之 湖龜齋	寫樂 戀川春町	窪俊滿 春湖	珠雀齋 歌舞妓堂	宮川長春 官川春水	勝川春章 小松白龜	以上	上卷
-------------------------------------	----------------------------------	-------------------------------	-----------------------	------------	-----------------	-------------	-------------	------------	-----------	-------------	--------------	--------------	----	----

勝川春英	同 春扇	北尾重政	喜多川歌麿	同 豊国	法橋関月	速見春曉齋	同 国長	同 国直	北 泉	柳川重信	長谷川雪且	以上
同 春好	春川榮山	同 政廣 <small>京傳</small>	歌川豊春	同 国政	法橋中和	竹原春朝齋	同 国丸	同 国芳	北 馬	菊川英山	泉守一	下卷
同 春亭	同 五七	同 政美 <small>蕙齋</small>	同 豊廣	法橋玉山	大原東野	歌川国貞	同 国安	葛飾為一 <small>北齋</small>	北 溪	英 泉	堤等珠	



燕石十種笈
三輯六之卷

先名名流記

大和繪師浮世繪の考

浮世繪と稱する者、或は日本繪より云ふもあれ、いと古くより唱ふる
下、百洲の川成字の朝小は、巨勢の金園、後堀川院の貞永、天福の源
九家權、大支藤原の信實と、同じく、中納言比類、あき倭繪の妙連、名
を得、一人也。信實の末裔、山左衛門部大輔、藤原の光信、繪師倭画を中興
は、是倭繪一流の祖、土族氏、
経隆祖と云り、明應年中の人也。古法眼承、承元、信も光信が
門に入り、日本繪を習ひ、画法を受、将野土佐各姓氏相分れとも、皆
委く日本繪あり、画家の傳記、諸書、要書、出づれば、云々、事舊
ふんとも、亦云、さん、其意解、さたとい、く、多、り、画道を學ぶ、初
心の為、ふ、多、く、思、抄、性、の、姑、く、云、後、小松院の山侍、貞永、年中
明應より、如、云、と、い、く、僧、來、朝、して、相國寺に、住、居、若、菜、芥、軒、と、云、漢、画
の、妙、の、之、名、以、當、世、不、揚、又、如、抄、の、人、あり、其、真、豆、別、の、産、と、て、東、心、殿、と、は、下
将野四郎次郎、依、信、と、云、者、画、を、善、く、後、大、炊、之、助、藤、原、正、信、と、改、む、叙

法眼物野祐勢心信と云 友法祐法とも書り其元ハ 遠列判更承享中の人也 如雪を師として画法を学ぶ

亦藤原の人ヨ春吉周文と云 人漢画の妙なり して画法を如雪に授て相國

寺に任じ 祇仙又祇漢とも云出藍の孫あり明國より秀文と云人來りて画を其元苑 彈園小作して曾我元を以て唐人秀文と云后蛇足は画法を傳ふ周文と混同と云

切祐勢心信らの人ヨ画法を學ぶ僧雪舟 雲多勢等稱と云祐申の人小栗宗 丹青の妙世ふる如あり

丹悞ヨ周文を師と云 小栗宗舟ハ周文の高弟也 宗悞ハ作らざる画家はは後相國寺に 入て悞とあり自物と稱ん

心信ハ宗舟ヨも教を受てり 祐勢ハ如形多人小隨て画法を學ぶは後物野

一家の画法をまより然れども漢画を以て故ハ雪舟心信宗舟ハ其學より一

れハ事勢皆相如し其后明應文龜ヨもて祐勢の長子物野四郎次郎友宗

元信父心信ウ画法ハ意を嗣ぐ其后異教ヨもて后ハ明の鄂沢ハ元信ウ画法

を見て師とせん事をまよとて祇前ヨも任す玉川と号法眼永化後世法眼

と稱ん 是利家ヨはて 永祿年中没ん 元信画道ヲ執りて大日本繪を學ぶ人事を欲して土佐

光信の女ハ倭画ハ妙なり然れハ元信是を妻ハ而て程画法事藝を學びり

然ふおいて自ら日本繪の風意を學ぶ人多ク元信も半ハ漢画を廢れと云

とも口中ヨ産んで何と異國の画法風骨を夏と云べき倭画の筆格を

建ふといふといふ物野流一家をふさんと云ふれども世頃の法眼ハ

戦國志ハ止將あり世の中安徳ありたり然れハ法世を侍り世ふれと

大和和泉或ハ紀別ヨ身をむその難を避て修ふ画家一流を云ハ高船ハ画を

附てかてけありも明帝の詔書を給り子孫ハ傳ふ一世の苦心を思ふ下

雪舟ハ法世ヨ遁れて法世を侍り後明ハ後ハ張有奇を師として其家の

画法を學び歸朝して日本ハ草画の筆法を傳へり或は後ハ雪舟ハ其画を以

て其家の唐画を以一家をなす故ハ漢画と云古法眼友宗の元信ハ其流ハ

画法をまよより本繪と唱ありせしふより物野流の藝名とありしと云

筆意ハありと云ハ本画といハ不如を末画といハと記せし附合の流といハ

支離一疑ふらハ其の誤りあり人按ふ本画の唱ハ物野一家ヨ限る處あり

和漢とも日本画本画唱あり支本末有況や画法ハ然てあや筆法規則ハ

之を以て墨を本画といハ是ハ反支を本末画と稱ん「無墨點」則是方

あゝぬいゝ皆丹青の達人海内近聞はといふまでもの事たのしくし物中流
流の青鸞源氏等の繪巻物奇の公昔物殆四季雅所の繪巻物雲と東常の官
女の丑衣若く藤がこしき英雄の軍譚後の忠実を耕し子前さる白撫ま
のいともいゝ漁夫のまあどり或は市中のそ妙老若物見托の性文
さる市女さききて衣しまとわい容今見ては質朴古風と思ひん
どそ画さるは世の今極あるべし今今の世は浮世繪師が流俗の
光景を写せども二十年來短くを見せし其風俗遠あり客を
以てあつし星を衣もさる押極れい昔繪ありこそ其時の世換の
いゝいゝぐらうんさるい昔の浮世繪も日本繪りて吾画たり或書
ふ為半く極漢の抄の屏風は漢画とやまるとその浮世の人物を画しり
たりと有とあんさ佐物流の強くも先さる浮世の画客を大
お人もと唱くも賦質朴の次女を雅人形或は浮世人物と唱ふさるい
吾得のいゝを以て漢画師倭画師と倭漢をもち

又その中よ水画師
花鳥画師長者

画師源氏画師源世画師かゝり得るも人を他より称するの唱は唐画の
花画茶画竹画水畫人おかしき花鳥画有り各ゆるいゝを云浮世画のやまを看 画法草之佐也といひ皆俗の云
か繪師あり此を画家の末裔の人ありとも規則骨法依らざれば未画素人画と云魚さる
後來画の真を写しをかえといひ然りとしくとも筆法画格倭漢とも小建しより是を
亂さびまの濃淡を以て画の位を定む是等をは辨く寫ははる画ありはといふ事なり
屬ともそれぞ古人の移すもあつて画をそん雜務様もあれどあつて純より
已が画さるはくして是を巧み筆法をさるの智ありて古人の繪筆を寫し
漏まを準的の画さるば扇に書事ありては是者偏痴と云りの之氏家々繪師
を重し軍用地理の字の爲すすべし後良が蜀の採石を覽くも蕭何が地理
の島を奪ひ以て漢中へ入めけるの陳蒼道を知る也夏の禹王が洪水を治め
徑陸の水郷を丹青を以て分ちりて地理の島よりわあつすや地理風景人
類皆真を寫し 根本より人の写しを亦写して 繪道を學ぶ者を画巧と云ふこと
稱す人も禽獸蟲魚草木を畫しは倭馬んがぬ画巧こそ所謂也或画家の白
古より似て似ざるを本繪の法ありと云りて片もち痛くあつて純より画法

曰まゝ遠く画は通達也心の欲する如く是れ成るをその画也古人の彩画を寫
しつゝあるが奚画の後寫の徳ありんや源氏物語の紫のまゝ源氏の君の頃大の
留守三年のまゝはれりある遊びの画をわたりて今日にそのありまの装束は遊の
了敵たふらんやうにありて日のあつた遊びありたふらんとして
休まらんとしてふらんとしていふやうにありてたふらんとして紫まゝとくして
あつたあつた遊びの画の心不心いふわく画日記にてまゝ奥列を知りてあひ亦
を相僧正が信長の子孫ありしを真画とてたふらして供養の不法を許し或は法服
賢慶が弟子法師の師の後女のあひを許し画を以ての功あり相漢の
例物奉すべくは貞永天福の以後堀河院のゆめ似せ繪をいふありける北面
の卜福は法身あつたの形をた京権をまゝ京権信実の形をまゝたせられける
ありたふらんとして信長の書寫と人を似貌ふわくせりていふも百濟の川中がまゝの
面を寫して其人をたふらんとして家の中の人を画して傳説をたふらんして漢の武帝の
孝夫人の画姿を樂しむ将門が首を寫して実檢ふ体しむ其を寫の妙なるなり

又女の似画ふりてを傾城の画とせしむサメト相漢其類牧奉類一王照君が
賄の潤を鉄の各畫より身は福をわくせりて其を寫すの事より起り
る身も信も其類の別な浮世繪師有て又女の容色を寫せりて皆多人の
画師ありて佛画画像又女遊女其の世の浮世宮画に至るまで其画師の起る
ところより其昔古人の彩画をたふらんして彩画質素を寫するが画の位ありて下
昇るると云ふは何の功あり益あらんやを以て似優ヤクの面を似せ画き女児の昇
りのとせしむより一端の真画とて画師の承く汚名の基とある歎ききうを今
似優の似せ画或は場サメトの起る昌の及て流りて浮世繪師の名是より汚き悪俗の
為に廢せられりて彼堂の罪ありすや亦悔ふともおのの昔蒲十の菊ありて
朽をくたれ浮世繪師と称せり昔土佐氏之言を承ふ岩佐又之承土佐又之承と
之者故有て土佐流を破つてられ流寓して市中に住りて其本傳画の妙の
あれば難人相の浮世姿を画き是を彫畫して繪合を易く僅ふ業のきばきとて
彼雪舟が其亂を辟て筑方の苦念の望み強んじみ谷の画をまゝして居りしむ

則ち其他徳島の画譜牧羊をもふ不遺皆是虚名を貪るものありは未
く画法規則を修くも為也今浮世繪を画く者小説の鋪綴續中或は
甚女町の傾城或は流り美人繪を梓ふ彫刻技巧を専らし餘繪と号
し板刺の浮世繪に江戸を以て第一と名産ふ徳島とありしは太平の
恩沢溢る昭慶を蒙る者ありんを以て考ふれば画所の各異るも
樂しき画くと後世の画くとの差別ふよりて思ひ得るもの浮世繪と
俗なるもの也

因よ曰せよ画難防とて画くを視て是を難し嘲る者ありいと古より
其事も後白河院の山内繪巻房と云者ありといふ能くも画く
も必難を見出りの也と古き書にも見ゆり然とも物の錯悞は時
の苦賦宮服古實也能く博識の言ふべきもの也知らざるを問は
法あり初て問ふに礼あり過て画くものありてある趣し俗画法を毎
すも是の長短画者の言を思ひ得る一篇の見體少く嗜了堂ある

とも怪齋齋の意ありものあり是あり取らざるも是らば女児歌の端
必其者の依怙思ひ負りて云事多く彼所の不画多難あり彼不
あり目や曲りやいづれありんと彼が他を寫せしあれは他は此難ありとい
るしと云ふれば其の代筆せしもの或は實物ありてあると云
が昔の思れり画の視どももあらぬを真偽の賞鑑を差立て強て
思ひ負のあやまらざるを修るは浮世画のうまいといふも一面新ハ師匠
が画き繁きは任せしゆ子は其師のわけしあらん或は人の師の画きこそ
本橋屋のゆ子の画せしゆんと云俗画法をあらざるは是を云ふの拾
七人より画き趣きをゆきよは譲り画き安きを師の画くハ師より傳
ゆ子あらざらば是を任せはとむべき是ハ繪巻房のあらぬ思ひ負
ゆきの多きを以て端なるもの也文盲思慮の解さ謂とて痲呆の限りを
それと云ふ事も初づいて冊棚珠もわづらひも松原と云ふ思純度難同
惑ハ阿房の半りのありハ秋の落葉を拂ふがや端も不及画法ハ相

徳書不羨〜くわんか金得とく〜佩文多画譜芥子園画傳の其端〜とす
と〜とも見て益多く古き本船の本に人物の部一帙あり新渡の華本に全部
と又裁判の本も有り倭画を学ぶも漢画の規則のそつ〜に性〜より
画家の端式に異貌を修ふとせよま〜画人の業を賞せん〜と夏を画不純
して画法は及もる夏あり仙術を絶〜と恐るの画の中ふ言を絶〜就紙を
とるもて空不昂り居抜ゆて天ふぬ寛平法皇の御所の障子の馬のるを
喰〜い〜夜あり〜ゆ〜の争鬪を賞せよ〜の院宗院の障子の鶴を〜とて鶴の
院今有り〜の華光の筆の妙を修〜んるの法川半が九相の鳥の悪喫の飛弾の
匠工と功の勝者を比んの群言あり元信が馬の教に在り其五郎を並〜んりて
川半匠工の法を消金〜北地の家が郭のまをせ〜いれ泉式部のをを
賞せんのみき〜とあり金景又の古法眼の筆捨松あんと唱〜れ松を賞す〜の
謂松島の院の風景を有りんのま〜と文友宗麟の豊後の丹生もふ物院室信
法眼承徳源四郎と樹岩見心大明の人画端ハち其の勇まを扇との傳あり吳正
宗秀之兄

これ猫の画の年時の高推るを 猫を画くが目を丸くさ〜の法ふあり其のやくふ画〜の法あり虎
と〜の死〜を写〜たらんと
思〜の推量〜を〜とを用〜 藏戴心松の闘牛の場りを牛飼の難せらぬ〜を賞せ
〜の端小類〜夢中ふ思をゆ〜りと〜と云傳〜るも神靈を見て状を
ゆ〜るとも疑説也画難居が松の繪は肩を書居〜を〜を見ゆ
〜の生類を画〜ふ食物をとほげん死画とあるあんと画法は及〜る
の異貌あり〜画を〜る學者理屈を〜て難〜傍の二僻あるの〜と古今の
対端ハるを魚〜と都説とあり古人の傳神妙をを絶〜〜るの意
画法を色傳り一徹のわ〜も性〜者〜〜目撃と〜る研究もせらるが如
人物の〜と〜もあらんと感身の飯きをゆ〜る〜其の〜は〜もが左
あり夏紙以て賞鑑の決意自然筆嫩〜〜代〜歴心の苦惱を視〜る
両法の八活落墨設色筆意画法礼〜とを看を旨と臨摹〜〜騰寫し
て画〜りの画法筆法必礼〜是等の説を聞張りて板刻の画の浮世繪〜
たらぬあんど半学貌〜て本画師謹画師あんど真の知をぬ米〜命を

扱ふぎ身分の職法も不知く、字晦の即ち繪を以てても画法の或の端
を不承四言回文を不知く業ふ疎るべし不知方りあると自誇韃韃繪を
明画と心得て唐晋漢宋元明を混同してこそまじは設色法に五彩を煉
る加減をも令得せしめて市中の者を倒画といひて繪會の人を素人画と
嘲る我意を不顧して人を統轄いとも画習子傳の秘ありと是を笑へ
り已瘡を患て人の疾を嗅きと云の敷奥を喰て鮮嗅さば婦かや
當世画に板に繪具の潤毫を不反墨筆の禍福も粉中險筆せし
して四喜雜辨ふ人物生類の光景萌ゆるも魔卧樹木疎荒亦英麗
をそぐ其意を答るる余の物凄くき風雨霜雪戰場控銃其状を寫て
実事も有ると風情を細く繪寫事画法を不承して筆をわたりと雜
唯も云を五彩を施さるるのこふ拙き規則を不知業ふのこ長るるりの画を
ハ扱不個大抵ハ可ありといへとも履をへて痒を搔如く情をそぐべ
くつる夏のと多きくんの況や才を筆動らるるべし彼是雜文騰画し

て是を画とも不具うして拙く畫一篇の板刻画をたら如勢傍罵者是
を辨く、近世画を視る目をそぐべしと耳をまぶの人情を業ふり
傍もくも者をば拙きりの是を姑精さるるべし嘲り尤を穿鑿をりて
云を以知と稱して一丈の虚勢大の實を云とくは是を傳へて同輩
輩風流の餘情を樂むに傍りてる不精者の之競争いふ穢歌の
俗語有といへとも多親の敵の如く我同門の族より確執あり杖
意も募り依好を以て業ふに疎く心誇て唯も慢大を吐き己が業の
不及い代筆を教へ自是を廣く軍中の拾首してこそ名を争ひ威
快をらふいといへ画道の本意を失ひ古人の名を及をまのこあらは
自誇るる古人の名を嗣己が拙きも不顧古人の名を以てこそ名を求めん
とて茶室名刀のこく古きをそぐび千辛万苦の巧を短くし故ふ業
をん恥辱以て後世控或混同してこく名も發せば古人の名を汚し事
甚衆甚しは官の者累代家名姓氏を嗣相續する其族先祖を失はば

して未嘗の勤る所を血縁もあらず縁をあらざりとも其歴の英
名を好む古人不悦情は不堪仇をくさして忌嫌思はざり其意は及ぶ
づらざるのあらんや強情の黨多きんば其猛威は押倒さるる
愚俗は或る者多しと世^{文化}画中の類を梓以て市中の
費見し一粥飯ぎ扱えも是は準的多く古格を失くす者由あり價を貪
り画工作者をかいぐるり巧拙を不察下職と俣ふ扱ひ馬糞と屢
改をわらまき大糞と却麻味唱を同匠^{ジャ}厨番ハ牛の糞ありと思ふはも
全録を以てちど杖意を居りりり給食を男て業こそる者ハ是ふ
怪し止初のる遠もるが算秘は是非がいと世畜生とわらひわらひ
を銀の繩は扱束る嗚呼哀しくり屠もるが画は業は以て者ハいくわら
甲劣の堂ふを号んや匾楹の志は理編する一杯の水を以て車轂の火を
扱ふが如く病大はればをなはれりいり憤怒は増え却て患を以て
仇を以て恩を報のれあり 愚俗も 僅ふ此業を學びしはゆもあはぬ画人

筆の中が画名をまらし彫刻一世はゆりりの數十部あり夫のあらは同
名の者法圓をまてありといふ事や朋友より告ある事扱後以て
京師の書肆より發市の小冊も偽名あり果し事や久しは復隔し
或は扱人扱えの購人を欺き賣るるわらや其初の出賣ハ画料を貪り
書かけたる画の半より他くあらは偽物を扱へ一應以ててもあらぬ
亦繪行拂の名を同するのハ僕よりも業の汚るる者ありとを同者姓氏
聞合せりりのは是も其の愛信せし事やんとも我食を喰ひて他の名を以て
一癖のいりの好あらんや思ひ入るむの奥は隠がはらや其性乃心あらは
といふ古方よりとづき只清會員を樂し不細とて其業を廢て其流の
いあらざりしとき日本繪の愚考を朋友の需に應じ徳育の存せし
あき事をとら流しふるん干時癸巳冬其初根岸の時商の於宗室を
巻誌

吾妻錦繪の考



東都東一の名産として他郷の者は江戸よりゆきぬ江戸繪と云ふ必を是を求む
事とありけり世俗をそ一枚繪といふ先ふ山東醒世翁曰延宝天和の一枚繪
といふ物を江戸に人ありてみよふ西の内といふ紙一枚の大ききついでにわくを
氏者繪といふ丹緑青紫をもちてとらふかゝらふ色どり大は繪の今かゝる
いざりある物之画いみふ上右の古佐風をえり画者の名いあまふはもとよ
り舞舞妓役者遊女の影ひの姿をくむ元禄のころゆり後者の姿をくむと
いふ丹と楠といふものありて色をとり江戸生の所より半帳云元禄八年の比元
祖園す希鐘旭ふ松をその容を画き刻て漸ふ貴の價五文是より後者一
枚繪と稱するもの數種を刻きと云ふ承正西徳の比正出らふ所り享保のころの
回朋町和泉屋権四郎といふ者紅粉色の繪を畫すむ是を組繪と云ふ
より色ふくまゝして是のよふふうをぬり金泥をこを用ひてくまゝ繪と云
て大ふゆる寛延の比より粉色を板刻する事なるといふは紅藍黄之遍摺

ありぬわのちの吾島綿繪といふものも是れ今ふりまゝに花美をそせり
或人云寛文の比に板刻繪や大津繪の如く種々の武者繪をうた画にせりぬ
板刻ありしに延宝の比より一のなまこりありぬやをきくは享和壬戌を
十月記と有り 山東京傳が蜀山人所爲の浮世繪類考
板刻の画は寛文の比より起りて
校訂の進考の巻末ふりして送りしあり 板刻の画は寛文の比より起りて
天保の今ふりまゝに八十餘年のものありとにあらぬ赤摺の粉色繪多くありと
より上より今も多し綿繪の精巧天明寛政の比に大坂少しに等閑の
れありし今に江戸も綿繪を仕習ふ多しありぬ寛政の始より重宝銅粉
雲母の粉色摺をそせりしより後に面摺きの中一等は工風をせり近比粗
可貴豊摺の小美をそりて去毎に三つおとらんとて写生摺無地金摺などを
製しこれに再應星を挿し入れり是より江戸賣買の綿繪は金摺り
ハ止たり

摺る小室曆明の比に今切繪とてみよし四切りの三遍摺の繪有是等の數
いぬし其の後大書と摺ありし奉書二切を大綿と云今の奉書中を

書ふ用イヨマサと云紙を用ひ合ひきも今上紙を用ひ伊豫を書二切
を合綿と云りみよし二切を小合綿と云大綿二切の中綿合綿二切の中
合と云伊豫を堅四切をきものと云ふは種々此紙類ある産の紙を
必紙用て摺るの過ありと云り

草双紙も文化の比より挿画の表紙とあり合巻といふものありぬ正徳享保の比
赤中と云紙敷五枚位綴るるは紙の表紙ありしを赤く染る紙ありし
是を赤中と云まより甘朋黄色の表紙を赤中と云ふは昔表紙と
ありしを赤中といふなり天明寛政の比にんまや中をききふのときもは
紙表紙を竹半紙よりを紙入るある草双紙ありし是より今の画表
紙の合巻を製すなりあり 今吉原細見五葉の松の製すの
少き所載をみる

摺るふ而中と云り金平中と云紀遠が黄昏日記ふ曰元禄年るの板あり固
法書ハ金平中の作者ありと有りまより後西遊記を紙や一紙を命字
治拾遺のお徳あり古切花巻咲ぢいの一翫業一昔中を情り童

蒙の弄と云々一赤中といありんそ後還魂紙五枚ツ綴て價を六文の賣し
黄表紙とありし比ハ三四八枚の繪を切て表紙不洋一々享和の年より價十
文ツのあり多きは比とい昔也又ハ目如友作しき双紙ありし京傳の滑靴有
仍もて年毎小書を所るし畫の目をよろこそせんとして敵討の物語り
とありお後軍冊をせしより一年二年と軍冊を次ぐともありて海表紙の久
小繪繪を切移て張りたりは比より中紙摺とあり或ハスコト云紙を製を
まより表紙一面の繪をよりきき是を海繪の摺付表紙とかせしあり叔父の風
より繪表紙の合巻と
あり文化のよりあり是よりいつとありき双紙の名ハ唐もて合巻とありし
いより近世ハ道中双いもよりし小工風一美をそし代紙白粉
齒磨の袋もて海繪摺ありぬあり美麗をそその張るといふ
此とのあり

○岩佐又兵衛

土佐ノ又兵衛 浮世又兵衛 トモ云
姓藤原 荒木氏 越前之産也 一説ニ根津ニ住ル摺有レハ
姑ク越前ニ從フ

父荒木根津守村と云織田信長小佐軍功より公賞して根津を世帯後
公命ニ背て自殺ス又多聞村十二歳乳母懐て中野寺の子院小隱也母方の氏を假
て岩佐ト稱を成人の後織田信長小佐の画圖を好て一家を承て能楽師の風俗を家
をを以て世人嘆て浮世又兵衛と云世亦又平と云ハ画所預家小田や傳あり姓首録秀吉信長
此傳として荒木村守より有園の城小佐より河原林法を秀吉を殺すといて
秀吉眼差を引出物として是を稱を天正元年四月信玄卒し茂忠公信長
と不和小佐將軍家漢代の臣細川慶之藤木の城を居る村重商人佐久留信
成守りきて信長降参を改軍の城めて對面の時信長刀の切先を鑿取二ツ三ツ
法らぬき我芳志ありと摺出りぬ村重大の口を切き切先の鑿頭を二ツ三ツ
んと信長笑ひぬし以上記方ニ無文ニ藤貞幹ノ好古目錄ニ見ゆ
按る是世亦といゆる浮世繪のよりありし又大は画もは人の書いしせる

なること香名園苑以上 鎌倉公方持氏時氏の比常陸小山栗の城小山栗判官並
氏隆者の為ふ身を亡く老老の好画工と云ふ栗宗丹といふ五代目の小山栗大六
東照宮の在世の時仕へたる由便書を和名秀康と云ふ付人ふあ成領知二るふふ
て越前家家者お初小山栗美作と云ふ姓はあり始り由命なること云

進考曰扱ふ一蝶々四季の画の跋ふ越前の産と云ふこと云ふれり越前おお
いそ成人もいと名をい知人もありしやうこと云ふなる物を見る
以又き郎う父を名振津と名付村重家と云ふ重郎姓氏不詳といふ者有り俗
称久翁後ふ内膳と云ふ一翁と号し松平直信元信の長子兄社
雪宗信の老翁門人少く画をよくそ一説ふ又き郎と云ふは人を師とて
画を学ぶは後ふと佐光信の明應の画風ふ倣そ一家をあせり世光行の門
人と云ふ漢りあり時代同くこと云ふこと云ふやいあを云ふは堅進考上東京
岩佐又き郎の姓氏云ふ未詳と云ふ見同せり云々繪の古佐流の名多あり花鳥
人物鳥小絵筆筆意の純妙高と云ふ中浮世人物ふ妙なり古佐流は浮世

の人相をさして雜人私雜人物浮世は人物のい武者人私大和人物ふこと云ふ人
あり古佐也門中と云ふ 年百の人之あるを姑く勳氣と云ふ流流と云ふ画は以
て浮世といふ今云所繪師の 從來名を好む世ふからん何れなく人の好むふ應
じて画くことともゆふあれが自ら世に用られこと云ふ古佐流破門の才子
あれはといふ今ふ事と云ふ又き郎の画ふ古佐家より定ませは極をふ出流の
跋のそあり是をお跋といふ禁裏繪所預るは古佐流多將軍家少將軍氏
此繪を用ふる如くありて詳ふこと云ふ古佐流の送脱甚多と云ふ
姑く定ふ観くつらふこと云ふを記すのこ

- 土佐流 仁明帝頃 相覧一弘高
- 之元祖 大納言 金岡 巨勢 金忠 天曆頃 公望 金高
- 隆信 五位下歌人 永業ノ比狩野岡ト云者 信實 從五位下藤 隆親 中務出輔 伊与守 行智
- 長隆 五位上哥人 長章 越前權守 光忠
- 土佐氏 經隆 從五位下土佐 行光 越前守 光重 行光子 廣岡 土佐守彈心永 享中人光重子
- 祖 信實 未齒 光信ヨリ土佐氏ノ和画中興ス元信ニ門文ヲ大和画ノ 光信 繪所中興刑部大輔 廣岡子
- 画法ヲ受 光信ヨリ譜代土佐守ニ任ス明應年間ノ人

光茂 左近將監主佐 守光信子 光持 刑部大輔 慶長年中 光高 將監

女子 古右京繪所將監狩野光信妻 秀吉公仕慶長年中人

女子 古法眼玉川狩野元信妻善画 古法眼文明八年生元禄二年卒

京都繪所預り代土佐守二任今土佐將監追累代相續 將軍家ニテモ土佐流分家江戸二住又住吉内記板谷桂舟是也

又々画小名印有る物に究てテ遊女の画と云ふを因りて字體分る
あらぬ平者も多し世を送る者も多しセーのそある生質是れ一
あり孝母の人慮多きむさがり己まが未熟を及ぶき山の代筆も
も名を顯し唯花押の主流を才一して我物類ふらるる愚昧の弊不反
ま事おのほく名人の所為傳るる所め妙と云へ

○大津又平 大津画一説追分画ト云

拙ふ元禄三年此板の東海道分所繪圖小大津大谷辺仙画ありありと記
むら仙画を考ら書き今分の芝戲画ハ侍飛列心中も坊と云へ

俗稱之為る農業本想一人死をい道法師と云て是を藝と本名ハ石地庵或ハ

十三仏ありと申俗談志不見也又大津画の闇慶并觀音を寫とも小古画之

大津画の筆ののりや何佛 まを成

今も仙画を彼地の賣とも大津画の画風ふりて此の仙画を板刻し粉也

しつゝおん本物又標曰浮世又畫ハ大津画の元祖と云ふは誤也人言ハあ

まと多しある証あり古き浮世理の傾城及現存 作と云ふ土佐の末裔浮世

又平重典と云者大津小伝を画をききたるをつくまは是よりてまもく虚説

を傳ふ或説大津又平と云者何てむきけむ享保の頃と云ふ孫ありと云ふ

大津の古画奴の陰を抱く圖を寫す半々又平と云てむきけむ花押あり古様あり

とのあり彼又平も孫の画々自享四年板好色孫日記大津辺分やつて繪持の勢

ひのあき画をうる大谷云々繪持の画もゆるものといふ大津画も浮世繪不類し

且浮世又々働うとを弁んが為ふ是を記す

當世又々働 名を似せしむあふ一

曰半々術

揚子土田才を術ありし

元禄五年板買物洞方之合集後小京を以て半々繪う丸也町西洞院古又々術と
り是亦も岩佐又々術が名を似し物あり又是ふあらせて 四条通山旅所
のうら半々術とあり是亦も京の浮世画也
以上浮世繪類考追考山東庵
考證香花園藏書

○菱川師宣

正保ノ生 慶安兼應明曆 寛文延寶 天和
貞享元禄 寶永正徳中 没ス七十余

姓藤原 一説 日本繪師 菱川氏 俗称吉兵衛

後刺髪して友竹ト云安房國平群郡保田町の産也

昔々蘭師宣ハ其年此村より江戸へ移り居りて繪師を業とす後画を

門に入て學ひ後一家をあきり浮世の如くあり亦板下画を多く作り浮世板下
画の始祖と云へ 後刺髪して友竹と云 村松町御下目之住也

傾城遊女をよく寫り彫刻の画も多く 浮世繪類考 山東庵追考之

菱川師宣傳并系図

菱川吉兵衛師宣刺髪して友竹と稱す初め繪師を以て業とし上繪と云りより
画を書きあらひて後一家をあきり英一蝶也時を同しと云も十年よりあ
きて世あひる揚子土田宣ハ其の畫風を好て浮世又蘭 老飯氏
の筆意ふ倣て一
家をあきり一蝶は狩野家の筆意を以て一家を成せり其の近世の名画あり一蝶は
りりし時師宣の畫風を考へし事ハ四季の鳥跋 一蝶の形
出せり と云ふは岩佐菱川
の上ふらん子と思ひしと云うわけを以て福と云へ 師宣もその印本の
板下と云物を畫て板刻の繪本甚多し他家の人江戸繪と稱して板刻の畫を既
ふは人の起るるにあり 栗

山城の吉保むさひも 松ふらや 其角

菱川 やうの 吾妻 伏 山形

みぢ 栗ハ元和三年の板ありは比ささくより少初くををんす

菱川氏系図

藤原姓

菱川七右エ門

房州平群郡保田町住
細屋ヲ業トス

菱川吉左工門道茂入道光行

寛文二年二月十五日没ス

房州平群郡保田町住 家業縫箔屋其業精妙也

菱子

菱川吉兵衛師宣入道友竹

浮世画ヲ祖始ノ縫箔師後
以画名爲一家

房州平群郡保田町ノ産若年時江戸ニ移リ居ヌ正徳年中江戸ニタイテ没ス
享年七十余
居所ヲ考ルニ貞享四年板江戸康子ニ村松町二丁目元禄二年板江戸
國鑑及同五年板買物調方三合集覽ニ播町トアリ一説探町横町
又大傳馬町二丁目ト云是等轉宅ノ如ナルヘシ

二男

同 正之丞

菱川改信

字守節

画風ハヨク師ニ似タリ

菱川友房

画風ハ似テ筆ヲトトリ

古山太郎兵衛師重

江戸長谷川町ニ住ヌ元禄中ノ人國鑑
ニ見ユ三合集覽ニ
菱川太郎兵衛トアリ古山ハ本姓ナルヘシ

古山新九郎師政

享保中ノ人

称文志 両国米沢町ニ住ヌ

此人ニ至テ菱川ノ画風ヲ失フト也事談ニ見ユ

妻

菱川吉兵衛師房

始吉左工門ト称ヌ鹿子及國鑑ニ合集覽等ニ
吉左工門トアリ父師宣ト同居始画師後緋
屋ヲ業トス

二男

同 冲之丞 師永

鹿子及國鑑ニ作之丞トアリ一説ニ酒造之丞父
ト同居彩色ニ妙ヲ得タリ

妻

同 佐次兵衛重喜

家業緋屋

同 弥右衛門

師宣ノ血脉六代目ニ至リテ絶ヌ今養子ヲ以テ家ヲ續房州保田町ニ在リ
是七代目ナリ女子他ニ嫁ヲ生ル血脉ノ者同所他家ニハ有ト云

房州保田村林海山別願院境内ニ在ル

洪鐘一

周廻 七尺厚二寸五分
一口口二尺二寸五分
長サ三尺五寸

寄進施主

菱川吉兵衛尉藤原師宣入道友竹

元禄七甲戌歲五月吉日 鑄字如上 予打本一紙ヲオセム

以上房州保田町医所渋谷元麴小同て之を實を記ス之元麴ハ
菱川の親様あり 以上京傳類考 追考

杏花園藏浮世繪藝考曰菱川吉多衛 沙室大和繪師大日本画師也 称
以房州の人也

繪師宣筆 和國百女三冊 元禄八年板 又ゆゑの大妻一冊

勇士ちり草二冊 貞享二年ノ板 大傳馬所三丁目 鱗形屋用板

画本大和墨壘 三冊

月次のおまひ 二冊 元禄四年板 恋のこゝろみ 一冊

此の板刺數ナリ

其外天和貞享の此の板多ク貞享四年の板江戸麻子小浮世繪師

三村招明子目 菱川吉多衛 同吉多衛

元禄二己年板江戸圖鑑小

浮世繪師橋町 菱川吉多衛師室口所 同吉多衛 師房

長倉町 古山右衛門師室 浮世戸川伊左衛門俊之

通浦所 杉村治多衛 正高 橋町菱川作之師永

天和四年板ちり草大令ニ 菱川吉多衛 沙室トあり

貞享三年訓蒙圖彙原板ハ吉田半多衛 画再板ハ師室画

。床談儀。艷書軌範。旅葛籠。色双子。近世大よむ

小師室画ありとあるやいふや未見

貞享元禄の頃ノ板元江戸大傳馬町或丁目 鱗形屋 吉多衛 今馬喰所西

村等八あり

元禄五年板買物個方集覧 横切中一冊

江戸浮世繪師菱川吉多衛 同吉多衛 同吉多衛

三馬曰元禄十年板小家了葉記 七ノ下二

大和繪師

菱川吉多衛 日 佐多衛 日 吉多衛

村招町二丁目

如斯出たり

按ふ井以長身々俗及希小西史を以て方如画師ハ倭画師を猥り
秘を以てらつるを述べて

俗説年三白俗間画師と云ふ倭画師と云く者あり倭画師ハ姓あり
續日本紀曰灵亀元乙酉年從六位下江見押勝り姓を吏為倭画師と有るを
とて下みりし書へり

○英一蝶

一蝶傳諸書記スヲ見ルニ誤リ多シ浮世画師と云モ有テ世々人物ヲ画キ
師宣ガ繪風ニ出タル丁モ見ユレバ暫ク浮世画ニ列ス

姓藤原 多賀氏

一英氏ト云
母姓花房去

攝州大坂の人也俗称助之進父ハ

醫師也十五歳ノ時江戸小来リ狩野安信

古右京養子探幽尚信常信
安信續慶安心徳ノ人

門人とある名ハ信香一ハ安雄始メ多賀朝湖と云流シ英一蝶と

改メ一字をあそ書画とも能く流の秀才子也

号翠菘翁

一菘翠ト云
誤リナリ

牛丸

知名ニ云
ハ非ナリ

曉雲

俳諧ノ名
暁雲堂ニ云

奮草堂

一蜂閑人

後ニ門人
ニツル

隣樵庵

鄰濤庵

北窓公羽寺

數号アリ

傳小田一蝶ハ親小孝あり人ト云ハ桃潜ハ芭蕉翁の門人ト云テ其角風を等ト

友あり名を曉雲和共ニ作和想と云ハ花樹小松と云ハ名ありト云ハ元禄

十二年十一月

ハ年トモ
訛アリ

号坂町二月新造小庄信の時を去テ滿中らつ時ハ藏年七滿

居ふ所より十二年寅卯六月九月

四年トモ
非アリ

歸郷より子孫英

流花房トモ
母の姓アリト云

一蝶と

稱ハ北窓翁ト号を享保九年甲辰正月十三日没を以年七拾ニ方麻布ニ中板

日蓮宗兼教寺塔中顯兼院ニ葬ス

辞世

少経の如く世の業の色もあらず月のはる里の空 一蝶

一蝶の老母を人あり相好して姉弟と云一蝶ハ丈夫に流を以ては蝶ガ友室

孤の家小やふる宗孤俗稱横谷次多傳物所ハ信を以流ニ己年三月二十日

没を顯兼院小墓を

以上類考追考
宗信ハ記

一説小田一蝶流をらん老母を去テ親族あり友舎以子を以流瀧石より

画を臺中を教りて予信を以母を去テ島一蝶と云ハ是ありト云 未詳

誤りある横谷宗孤(瀧石)の図を母ふるを去テ送りしハ松のことありト云

(一) 畫の中(一) 入て送りしト云ハ是と云と云と云らもあり

嵐雪撰其袋

元禄三年板
一蝶白りり

花了まそりそせぬおの盛りの中
新編しそ撰ふとるれ四の歌

咲や
曰

高嵩各藏

英一蝶

七十三

美應元生明曆万治寛文迄宝曆天和貞享元
禄宝永正徳享保元年没ス

二代目実子
一蝶

名信勝
俗称長八

一説二代目一蝶ハ八丈島ニテ出生又赦ニアフトキ
共ニ江戸ニ具シタリ是ヲ島一蝶ト云ト云リ

二男
一蛭

俗称多賀百松
後源門ト云

一舟

一舟男

一川

一舟ハ門人ナリ養子トナリテ御家ヲ継
名信種号東窓翁俗称弥五郎
明和五年廿五日没又頭余院ニ葬ル
月ヲ脱カ

門人
一水

一蝶晩年ノ門人

一蜂

号春窓翁

一説ニ云一蝶子
多賀長八郎信勝号一蜂

門人現
高嵩谷

别号屠龍翁
号一雄

高溪宣信

室カ

一蝶の画歴定まらざるが将堅安信此門人あるとも物師氏も是を以て昔昔画とい
やめて不用町並とありしありありと佐の又多謝是も同

或書曰元禄の比五代將軍家細公

常憲院殿ト申ス
室永六年薨去

好色小脱らるる吹上は屋を

てお遊具小美を屋しめふかの由記中少三の丸お徳の方トテ君の内心ふけしる

ハ玉極小身ノ十五儀美人持持馬殿白浪文々扇娘ナリ伝年ト云リ
市旗中三昇進シテ一冬粉粒土夫白浪遠はちニはせられり
お徳の方小脱の上るは公内

淫抱セハ内側カ一調を吹上は屋を池ノ舟をくらふ公ハ揮き一はか

信の方ハ鶴を去くハ公内淫遊一揮きハ内樂ハ遊を是平日の事と不知人ハあり

比多賀新湖と云画師更女扇と云繪を吹上貴賤の波の画を写しそ中ハ世と書

ら風竹左舟中ハ鶴を打揮き一淫多ふりさるるのくく出たりはる淫ハ公内

ありん立所こまのふら捕入牢を罪の表に於て御書好ま
を其奥を釣る由此ふ遠流作付られし御書好まの繪具持来由
免私作付所しつを没せしを島一蝶と云居由赦免可なり百人女腐の由傳
の方舟棹ひれ神木極の由事をも由答ふ違下りし事業不依く刑せらるる由事
も出づるやと憂ふるもありしと云百人女腐の繪に我心もこれりし由事
思ひし圖を由給めり今ハ十ハ七八ハ傳へて英一蝶と名を改し御書好まと云繪を
せん能を特書將來の白拍子船ふありし由事の圖を由りしとあり英一
蝶とありし圖を由りし一蝶御書好まの十幅繪を書し時もく是を好
ましと云や

或書小於傳の方書又白砂大島甲介士甲聖同心之孫儀親持於新地十るる由事
賀より小の由事之由事大島小いんを討てし由事之由事五の九極由事御
威光を以て由事御書好まの捕江中しつと云川を御書好まの御書好ま
及びあり五の九極由事美法ハ幅の御書好ま右松子世あり御書好ま
子内之由事及方家名おまや新地十るる由事江州三上城之遠處を御書好ま
と名おま 忘の由事こみこ田山由事七希と云り 以書ニ空曆
七年トアリ 御書好まの御書好ま
波よをいれし浪御書好まの御書好まの御書好まの御書好まの御書好ま
をを枕をぐりし御書好まの御書好まの御書好まの御書好まの御書好ま

後水尾院御製

今宵御書好まの御書好まの御書好まの御書好まの御書好まの御書好ま
御書好まの御書好まの御書好まの御書好まの御書好まの御書好ま
その由事ありし御書好まの御書好まの御書好まの御書好まの御書好ま
をを枕をぐりし御書好まの御書好まの御書好まの御書好まの御書好ま
ありし御書好まの御書好まの御書好まの御書好まの御書好まの御書好ま

此英一蝶百人女腐の繪をもらして後水尾の西川祐信と云信女繪御書好ま
女腐御書好まのためと云好ま御書好まの御書好まの御書好まの御書好ま
近代繪事之巧英北窓翁若焉其氣象之豪放筆力之道

御妻のめくくたしものたふり事ぬる人むし此筆の四寸のこむた画をふく
 い帯ふもはるこひの心くましく眼をくろふ髪を千筋ふこくことくまふ
 きららるるなり一帯し今世のま換ゆらふまは髪のとありをこえはる袖
 大跡をさらばふたあまきる田舎たふあめ画とも思ふへうは常思ふり
 かまうては一帯をこくこと浦崎が七世のむまのまきこたなり一帯の作譜多しと云
も諸書ふ出たれは不載
 よろこびをそまの心をこれがうのま跋に英一蝶書
 扱ふ多賀朝湖長服可き丁目新道ま任やし元禄五年壬午
 月三宅島小流する時小歳四十六をく家永六丑年九月内教免源川
 小信をそま備后よりゆくのまあり享保九年正月十二日没以上題考
 深川敷の内一蝶
 と云者
 湯原氏記云 元禄七年四月二日没
 桂昌院様古角越前守と達之金屏風一双吉野之田の園多賀朝湖筆中
 新もく同一双大和耕作之園同人筆新門以上

○西川祐信

元禄宝永 正徳享保 元文
 寛保 延享 寛延 没年

俗称 右京 初祐助 京師ノ人也 居住

姓 藤原 西川氏 号 自得齋 一 号 文華堂

称 大和繪師 世ニ西川流ト云

京都小住始ノ狩野永納門ニ入法眼永真延宝ノ頃安信門人縫殿助永納字
伯受一陽齋梅岳堂西邑居翁ト号スて
 画を学ひ後為一家て宝曆明和安永の比大いふ世仍る中興刻本仕女大和繪
 の祖と云へ上梓する繪本数百部あり古今に数なき妙白之浮世繪師の名譽をか
 致しきう書画は人より風俗大にゆきまう百人美女即ち雪上之位のそま
 より跡のゆきまきと名を附せの風俗を写し画きかへる後又是を書画ふりき
 しくば罪せられしと云筆意骨法狩野上佐の二流をこあるを奪く画法よくあ
 い浮世画師は人ふ限まり或人の花出小祐信画の事と罪せられしを云
 るものをらるるし。世名を忘れし西川の事とあはれしあを後ふたを

し

有ども書翰を凡る俗家の者為み其筆端の畫傳をも委し其原本を平假名
小書して其意を流しむ倭漢一画法の奥域を極め其業は遠く其ありしを何
らり諸侯の助とあり是を為す世に其業の力を好む者衆くありん皆此
精巧の仍より尋常の浮世繪所より列する人ありん其とも板刻の畫小名を好
むれは如く其ふ筆はあまの秋もともなき其他の用もあらず門人多し

門人の國旌皎天齋 俗称 酢屋平十郎

此人名を不好し其ふ以て世に其れを生涯を困窮し其終り其落款
しそ世に送せり其もあられん人そ其を知らん古來如く類の後世に傳
らざるもの多し其世人多く其目を妙と目を賞め其事歎くし其る
あらそや

○毛詩圖譜 皎天齋國旌画 刻本世に其れあり

守國筆繪本

繪本通寶志 繪本直指寶

同 寫寶袋 同 寫宿梅
同 故事談 同 唐土訓蒙圖會
同

○雛屋立圃 立圃ノ傳諸書ニ載テ人ノ知ル
所ナレト爰ニ出ス

野、口氏 称雛屋 俗称紅屋庄右門 京師人
初名親重 明曆ノ頃ノ人
寛文中没七十一

立圃ハ書画を能く俳諧ハ名あり風流の一流人と云々其ハ其佐氏の門人ハ入
多し 元和寛永正保慶安兼應
明曆万治寛文没ス 醒世箱曰其ら浮世繪を其る其る中川春雪
竹の學双枝のさし多し其ハ立圃なり其ハ其歴代滑稽傳ハ雛屋立圃ハ画を
よく其京土里と云名所記自画あり其より竹齋の画ハ立圃之類考追考

時繪師源三郎 元禄ノ頃ノ人

有ども書翰を凡る俗家の者為ふは蓋箱か畫傳をも委しを唐本を平假名
 小書してそ意を流しむ倭漢一画法の奥域を極めそ業は道しとあり本を何
 らしし諸師の助とありそ是う為ふ世にそ業の力を好む者衆くありん皆以
 精巧の仍より尋常の俗世に傳へり列する人ありんをそととも板刻の畫も名を好
 むれは姑く寫ふ筆もあまの秋そともそぎ津他の用もありん門人多し
 門人の國旌皎天齋 俗称 酢屋平十郎
 此人名を不好うを以て世に知られ生涯を困窮しそ終りそ落款
 して世に送せりあるもあられん人そ意を知らば古來ゆる類の後世に傳
 らざるもの多しそ世人多くは目を妙し目を責めり事歎きしきり
 ありそや

○毛詩圖譜

皎天齋國雄画 刻本世ふりきり

守國筆繪本

繪本通寶志

繪本直指寶

同 寫寶袋

同 寫宿梅

同 故事談

同 唐土訓蒙圖會

同

同

○離屋立圃

立圃ノ傳諸書ニ載テ人ノ知ル
 所ナレト爰ニ出ス

野、口氏 称離屋 俗称紅屋庄右工門 京師人

初名親重 明曆ノ預ノ人
 寛文中没七十一

立圃ハ書画を能し俳諧ハ名あり風流の一考人と云へり當ハ佐氏の門人ふ入

多し 元和寛永正保慶安兼應 醒世箱曰きり浮世繪をせり 駿河中川赤雲

竹の學双紙のさし总多々ハ立圃なり 許六が歴代滑稽傳ハ離屋立圃ハ画を

ふくそ京五里と云名所記自画ありそ上り竹齋の画ハ立圃之類考追考

時繪師源三郎

元禄ノ預ノ人

俗称 居 号

醒世翁曰元禄三年の刺本は名有り西鶴が作の讀本さゝ名を阿らさ
さばとゞどもねなくいび人の画あり 以上追考

○人倫訓蒙圖彙 源三郎画

○月岡丹下

天明六年頃没年七十七才

俗称

浪花人也 江州ノ産

名ハ昌信 号雪鼎 一号信天公羽

高田敬甫門人大坂の春画の名人也又印本の画本多シ牧举ニ違阿ら
掃子小丹下彩色の春画の大老也をえりしゆあり

○羽川珍重

享保中 江戸人

沖信

別人ナリ
藤永 門人加羽川ト有リ

谷中感應寺の天井龍王人の孫重門人が羽川辰永と名有り享保の此浮世繪所
あり此辰永本吉系細見記のさゝ急赤本の繪亦多くくきぬ 以上類考追考
三馬云珍重門人ニ羽川和元あり

野々村治兵衛

刺板の繪本世ふ多し

○下河邊拾水

天明ノ頃ノ人

俗称

居京師人也

此人將聖家の画風を學びて近世の上る之板刻の費本多し祐信守國ノ刺本の筆
畫亦似るものととも大同小異あり

増補頭書訓蒙圖彙

十冊

繪本やかい草

天明四年板

洛西双立

書画 下河邊拾水子トアリ

繪本やかい草

その他多し多年見聞の姓名をよきねりし追り書かす

○長谷川長春

天和貞享ノ頃ノ人

俗称

京師ノ人 号

京師の浮世畫師あり好色旅り紀ふ今ノ長谷川吉田が筆もあらずとあり
之は人のより同村大坂と云ふ川馬と云ふと云ふ是ハ雪舟の末孫と云
以上類考
追考

○吉田半兵衛

貞享中ノ人

俗称

居京師ノ人ナリカ

号

姓氏兵ニ未詳

無色軒、席云△いゝこの忠法と云ねどふ通りの好色旅り紀ふの
筆りをくくつゝ好色をぶらぶらと好き思ひを志のまきあつてよりとありあつた
海のものかきと云れが所宜同村の人と云ふも吉田吉田の浮世畫師
へ好色旅り紀ふ長谷川吉田と云ふをんをんをん此流りの人とあり

好色訓蒙圖彙

貞享三年ノ板
画師吉田半兵衛ト有リ

長谷川吉田を尾板をいふ所宜の画ありそ尾板削せし被信也是を貞享訓蒙といふ

次扁小馬〜〜記をあるを板をいふれよ外題を牛と

○近藤清春

正徳 享保ノ比ノ人也

俗称

助五郎

居

江戸産也

近着助五郎清春とあるを記し金平本亦亦小多あり

三馬樓は清春ハ吉原細見紀兼 芝居狂言本等ハ自筆画をいふと開板

せり委く別小記を

○鳥居清長

宝曆 明和 安永 天明 寛政
享和 文化 年中 没ス 行年

俗称市兵衛

一説新助

関氏

江戸産也

本材本町二丁目住ス

鳥居市兵衛清長は鳥居三代目清長ハ門人近世の名人あり江戸繪の祖と云ふ也
菱川の時昔画の風俗ありしが中比ハ畫風を去つて一家をなせり清長清長の美
子画を學ばざれば姑く芝居看板画をお繪してかけり粉色摺画本浮世美人繪

繪世の初を以て鵜飼彫刻其の牧筆ふまふ邊あらはる一二を以て流を鳥居と號す
 茅の妙もあまら

繪本物見が岡 三冊 繪本

月 月 月 月

あゝ今世人の知る事あれし思ふを

鳥居氏

元祖清信 俗稱 庄兵衛 住居 難波町

清倍 俗稱 住居 元禄享保ノ頃ノ人

清信男 俗稱 住居 兄早世

清満 俗稱 半二 住居 芳町三味線師

清長 俗稱 関新助 住居 近頃錦繪彩色ノ名手也

三馬云元禄十年板好色大福帳再
 画師ノ名有り
 庄兵衛ノ元祖清信ノ俗稱也鳥居
 庄兵衛清信ト書タル画本多シ

清經 俗稱 住居 門人

清長ハ江戸画ノ祖トシテ始菱川ノ昔画風俗アリシガ中頃より画風を
 書クト也其後よりあゝの變化セリトモ江戸ノ習俗の画看板を今程
 を右風ハ画トシテ清満清信清經トモハ一板跨ぎ流をうけり

清満実子 画ノ学 和泉町ニ住ス 縫箔屋渡世

清峯 後至天保今 清満と改む清長門人也寛政ヨリ享和 文化文政今至天保住居和泉町

三代目清満の实子ハ浮世画を不画して縫箔屋を 業として和泉町ニ住ス仍之坊々看板画を相續せり其 縫箔屋の牌有清長門人トあり画を学ハ清峯ト名 けり今三代目清満と改む之芝居番階画看板を画 くと是則之代目清満と為ルハ実跡あり

清信門人 清重 小細町 市川清光流世画 之上手

清勝 高砂町

清次 月

清久 小松町

清定 花房町

△清峯ハ文化の始より文化の始近元九年の留録繪子双
 合卷ト云繪表流の三十也
 文化三年は専ら流行ス 此數流世美人繪亦多ク板刻て
 世に知らるゝ之秋川豊國の画風ハ傲ハ清長没故して芝居
 の看板番階画を継ぎて清満と改む板下画亦多ク其より

△鳥居流の繪ハ江戸大芝居看板書畫を画きて一流
 と其今程画風をふ改古き多双我亦程を寫し
 言葉古きを加へり鳥居流の繪あり俗多居軌
 筆足ト云々融波の多良妙やうんの如く画くを
 元祖信信の比より此もくもとのありて芝居者
 板画ありてあり古美もく事ありとて進云別記
 ふうふう〜〜ちんんとて

清廣
 清時
 清政
 清之
 清元

△此鳥居氏の系圖ハ新考并附録と大同小異ありて姑く之馬翁
 此考のものとて信信、附録の異同を不正

○奥村政信

享保ノ頃
 本屋奥村源六 江戸通塩町ニ住ヌ一本ニ油町書肆也
 俗称
 号文角
 おやま源六とく〜とく〜

芳日堂 丹鳥齋

文角政信ハ自ら日本繪抄とつけし朱之瓢筆此印を用ひ漆画も多し繪幅
 此画を能くみて眼ふ金箔をおきけり俗々浮繪とて名存を分牧狩の畫者
 我十番切亦遠京を奥深くもる圖を云板ありありそ比ハ大小流りを如
 画の始めあり所多ふや志道軒の容を冒一画くふ好ありと云々

○奥村利信

○奥村文志政房

一枚繪の筆双茂ニ多クアリ

○西村重長

享保ノ頃カ
 居通油町
 俗称

○石川豊信

宝曆頃ノ人

旅人宿小傳馬町住ス

俗称糠屋七兵衛

西村重長門人也

宝曆の始め此の繪の多し其人一生倡門酒樓小遊びたはくふく男女の
風俗を写せり一枚種ふ多く画本も有り

○鈴木春信

明和頃ノ人也

俗称

居住西國米沢町角

号湖龍齋

江戸産也

西村重長門人ト云

繪本を信の浮世美人画より多し一時の名人あり吾妻御膳と稱するは
画本小本の浮世画の多し此頃の画本のこころき麻の葉の表紙の紅屋敷の
お題をとりて之を○明和のこころより吾妻御膳を画きしり今を
是る頃初を甲の歴大の抄の大い流りて五云云 招きしりおま

しより下更として今の御画といふなり其後一生歌舞妓役者の画をかきして
之我の太和袴体あり何ぞ河原者の形を画くは纏んぞを忘るの如く明和
五年の江戸島五洲の泉おる津笑姿開帳有し二人の画女美のよき以て
舞もむ名をお浪おそつと云又吾妻の森格花のよきを健倉の娘おせん此
柳橋居柳居仁平次娘おるの姿を御画ふるもそおせし世人大いふこと
はやせり 以上浮世繪類考

小本画本

春の雪

春の友

武の林

春信筆画本也

△こころのおせん

△銘臺土車一時の者之△銀堂のおせんといふ御画あり

繪本諸藝錦

曰花うら

曰染れ石

曰千代栢

曰八百代草

曰浮世袋

曰春の縁

右春信筆あり

三馬按此門人某抄本所小伝て二代目春信とあるは年々其傳ふあり其
を學びて再び小傳りて大いあり 鏡画のよき別記をせり

○懷月堂

浅草諏訪町居住ス

俗称源七 号安慶

宝永正徳四年の比三月奥中江島版一件多生此新五部を島の時より
暫伊豆の大島に漏れすと云由挽所山村屋久とありしに比付あり享保中の
人其の誤ふ凡の姓名法を知らず其の誤りて其繪を以て懐月堂とのみ
なり 以上類考追考

○珉江

俗称

宝曆明和の比元繪師所後浮世繪所とある五文字点式おちび人の画あり
破人その画也 摺込の初名を工凡して大正世より 以上類考追考

川枝豊信

俗称

享保中ノ人 京師ノ人也

享保十六年の板 朗詠狂舞臺十云本の画者也

○阿里

享保中の名画あり山崎氏の嬢あり畠徳ハ△世事談ニ見ユ

○富川房信

年間

俗称 山本九左エ門 大徳馬町三丁目小伝を繪及紙問卷也

吟雪ト云

錦繪及紙あどふ出たり拙き方あり 類考 △
碓世翁曰富川房信ハ大徳馬町三丁目山本九左と云繪及紙問卷の主人あり
家おとろして後おとろとあり房信の子を七と云板印を摺て業を
又娘二人有り兄者三人共今存生を以山本九左ハ古き中屋也貞享板
江戸鹿子のみ見富川房信ハ代ハ絶せり 摺談人ハ山中を以あり本所接細所

○一 華齋文調

住居 龜井町

俗称 狂歌師 頭光あり

文調ハ男女風俗の流ハをきりしハ後者画ニかけり拙き方ありとも
極下画ハ出さるり 類考
類考附録ハ曰文調ハ後者画の上ニ二代目ハ百苑の顔をよく似せし
と有り

梅さふ

○柳文朝

年中ノ人

俗称

住居 通油町南新道

文朝ハ将豊流の画ニ學ビ浮世画をうけり儀者支那を好て柳文朝門方あり二代目
大谷十丁の似顔の上あり

三馬按柳文朝門人ハ文康あり俗称安五郎人唯々文康安といふ人ハ

一て今尚存也

文政元戊寅年
三馬が書入ナリ

深川吳巖寺十碑より今二代目柳文朝ハ尾張町の辺ニ居候をとり吳巖寺屋仕
入物などに画名ある文化文政の頃也

○鳥山石燕

年中

俗称 豊房

住居

鳥山燕石ハ一時の閑人あり殊に巧くしつとせり委き傳述る考ナ

繪本百鬼夜行

三篇迄 十五冊

水湖画傳

三冊

○細田栄之

年中ノ人

とある書所哥磨石小石燕の門人なり

○窪 俊満

俗 年中没ス 居住 亀井町

尚左堂ト云

俊満ハ狂哥を能ク画を此尾重政ハ字ビ俊春字ニ字ハ狂哥招物繪
寫之招の画ニ妙あり在筆之そくけり

三馬云俊満教作所ハ南院伽此系蘭ト号ト

青楼油汚 玉菊燈籠ノ辞ト名ニ小冊ニ他ニ字ニ改四五種あり

○春潮

明和安永天明寛政
享和文化文政 年人
俗称 吉左エ門

後俊朝ト改 号吉左堂

鳥居清長ハ筆意をよく履くハ穉穉や々字ニ改ハ多ク 藝者

三馬云春潮浮世繪を磨りて後潮と改む吉左堂ト号ス文政四

年己年今尚存を長壽の人也傳ハ別紙ニ録ス

○珠雀齋

年曆 姓氏 王詳

○歌舞妓堂

年中ノ人 居住

役者似顔の畫ニれとも拙れハ年々むりみしてお出ありを

○宮川長春

正徳頃ノ人享保中
俗称 江戸産

宮川雪溪曰尾張國宮川村人正徳年召江戸ある處少徳任仕佐門人慕菱川氏
凡○長考狩野家の下法を日光御用を初む移野某其よりぬ人その年
資料を一向にその宮川氏を腰腹く備候ふおよひ遠く口端とあり宮川氏
を多勢を打擲しその上をそ流繩をいしめ芥漏ふれお宮川宅にて
咄せしるる也その子孫ニお父を芥漏すりたをけゆる性年別業なりといとも
お人の事な足徳をいしめ難儀ふ乃至その子孫いより一刀を抜放し移野氏一き
りこみお人の事なるんか門人三人きりころを依之そまハ死罪長老ハ流罪移
野其の事ありその移野を理て室曆明和の以宮川春水といふ門人あれとも
宮川の上の移野氏あれを胎宮川と号を

宮川春水

俗稱 大和繪師ト云リ 芳町住
姓 勝宮川ト改 享保頃ノ人

春水

俗稱 藤四郎
後芳町住

深川

門人

新水

門人 春章

春童

林春道 号 蘭徳齋
門人カ

○勝川春章

又 勝宮川氏トモ

是ハ明和の頂歌書收後者の似款を画きて大ニ行りる五人男の画をよりぬ
とを抄めたる人形所抄七ちるとをその方小富居して画をもかり
しる所抄の法を判し壺はとも抄しつゝ文字の押しを押しやりたりなる
人唱し壺をといひ弟子春好を小壺といひき武者強をもより画し
三馬 按春章号 旭朗齋号 酉雨 俗稱 祐助 書画ヲよくし門
人 数多し 傳及 系 圖 等 著 しく 記 ぶ 所 あり

○小松屋

俗名 三ちん
後百龜ト云

明和の頃大いなる招りの画多く小松屋のうけし之西川氏の筆意を學びて

春画をもくけり肉ぶとんぬくの夜具等の本作り元飯田町の薬
舗あり

法東子云此二人本字柳ニモレタレハ類考ヨリ抄出テ書加ヘリ

○勝川春英

年中没ス

俗称

居新和泉町新道

号 九徳齋

始免其章門人あり後一家をあり武者繪ふ妙をゆくり宮政家初比き
ら瑞雲多々為市あり探芝居の看板画をゆけり世知る事あり自然一家
の筆意をゆけりせし上画匠の妙をゆくり一傑山高谷小比観を下と依物
師の筆意不似とそ妙を天地とさきと生雁浮世障ふ障ふハ切む
べき者之一流の筆意を顕せし相画をゆけり九徳風と云移色摺画下武
者画の中繪ふ致致種あり物奉と云ハ近世の名人之章章奇磨もふ

及安多一初代豊國ハ其画風を学ひしり

繪本弓袋

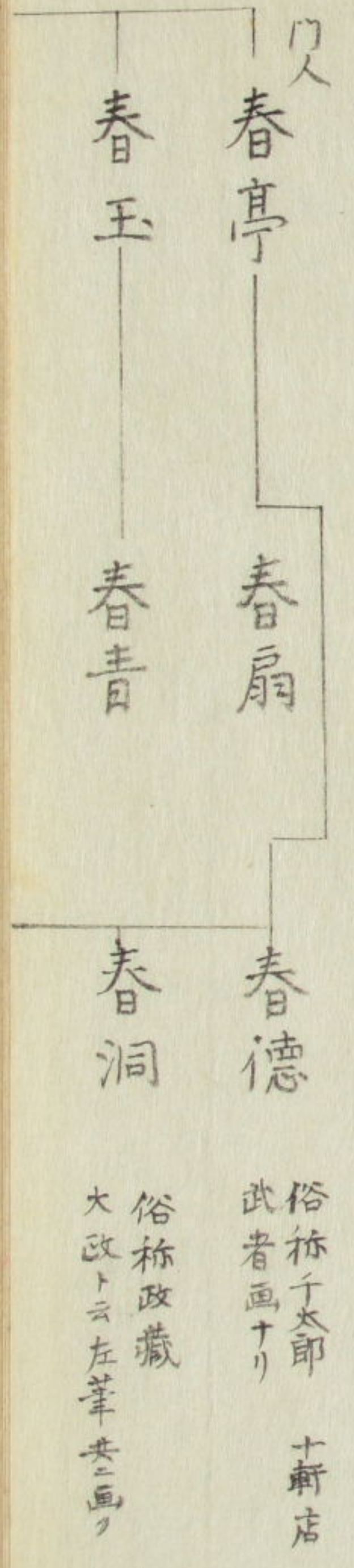
繪本

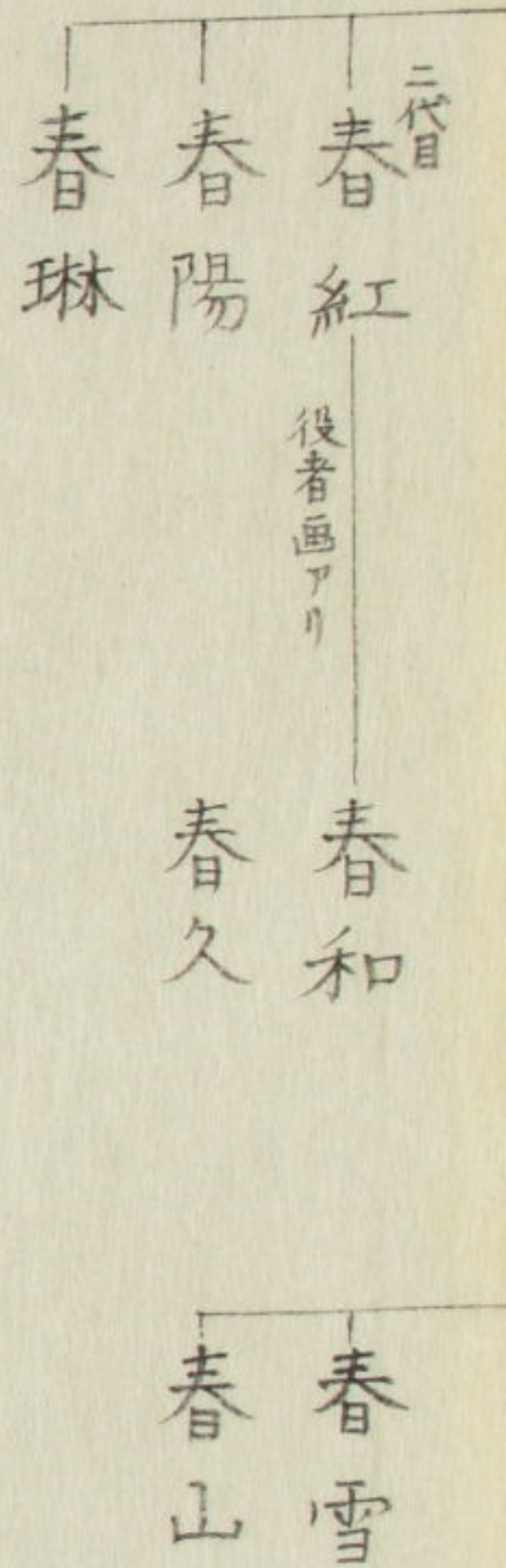
円

円

忠臣蔵土佐續の屏風中火消をさらきの画をわそ他人のあぶる
ものを多くゆけり

田云 麴町三の田某小道具して屏風繪をわを畫り奇絶
と云るゆりやう一あつこお初畫法ハ奇巧ありし人そ古きを
きりわて新しき圖を工むも名あり又倭をまきゆをよく諸
里之縁をもよくひり





○勝川春好

号 俗称

年中ノ人 居 長谷川町

去章の門人として畫と云り浮世画役者画多し

三馬云去好早世ふあらは四十五六支の比中風状患て業を廢ス後
年麻布善徳子の遁世して在しが馬馬翁の需よ成して市川白
猿の肖像を左筆をてあつてそのあり其國今う新白猿一首小見
可以上 △二代目 勝川春好ハ春扇也別ニ記ス

○勝川春亭

号 俗称

寛政享和文化ノ間人 居 和泉町

去英の門人也武者繪を善を浮世画役者繪一時のりる事双紙を多く画ク繪
本も二三種ありしは年月して病の爲業を廢して其居をふたりの惜
按ふ去章ハ去英より亦あらず世ふ若布を其の事双紙しき繪
目付のち多し後ふ豊國の畫風を画きて役者繪繪も秋川風よりはしこ

○勝川春扇

号 俗称 清次郎

享和ヨリ文化文政ニシテ没ス 居 始鞠町貝坂 浅草御門前 又神明町へ移ル

始の雪心埋等琳門人ありしが後去英小学ひ去扇と爲む文化の始め東要年

南北と云作者源平藤と題せし双紙を始て作り善画始て善双紙なるを
老板元芝 神明前山田屋 大小初子是下りして一時不浮世得者画草双紙をきりて
比是双紙の繪双紙同画ありはもを在まん事を挑あらしむ新板日
小多く善平を向町組の宗りしは僅の石あるも豊平大ひの廢せし作り
巧りし善平も一二種画り後右作りし位居を改め二代目善平と改名し板
下巻を止め是双紙明所もきりし善平の風流の者あり善平双紙の作をきり
善平を作名月光亭の善平と云り

按ふ繡像讀中の東里山人作源平藤ふ善平と云し五冊縫ふ翁作
摺巻表二編五冊あり

後陶器の焼付巻をうもそ板刻巻をばせそそは酒井繪猪口と
云しもの流りの始めありて也しつは是をのみ善平とせり門人ふ善平
と云もの巧りし

○春川栄山

俗称

○春川五七

江戸小石川ノ人也

文化の末より京師の位を業の門人ありきり未洋京の系ハ坂の多しハ位ハ
ありや江戸に在り此を好者の小まき繪をきり板刻せしと見たり二
様ふ不遇を好画名を足と

○北尾重政

年中没

俗称 左助

居住

和太傅馬町二丁目
右根岸大塚

木姓 北畠

江戸ノ産也

号 紅翠齋

一号 花藍齋

北尾重政の書画とも善画に純中板下の妙あり武者画名も小あり近來に

は幸願ハ鳥居風
画ヲカケリ其時代
ハスニテ鳥居風ニ慕
ヒナリ

戸書肆繪及紙同屋板の屋列或ハ姓幸物百人一首後帖の類委々書也
ともふかあり又曆の板下ハ幸政老年とも書キ一板下の筆耕ハ其比之於
小右ふりしものかうし花名の写真武者画軍旗数部筆を綿画
双紙の繪尤多ク名身の名人と云フ

繪本

繪本

子育草 小本三冊

同 譽の魁

同 同 同 同 同

同 同 同 同 同

後年二代目北尾重政と名を稱スル者ハ美丸ト云ハ人也

新糸物町、川岸俗稱

○北尾政演

重政門弟

年中ハ人中没ス

俗称 京屋傳藏

住居 京橋南一丁目

姓 岩瀬

字 伯慶

本姓 拜田田藏

又号 醒世老人

号 萍齋

作名 山東庵京傳

幼名 甚太郎

兩國回向院ニ墓有リ浅州寺筆塚ノ碑銘 家弟京大撰文
山東京傳ハ書画とも小善を戲作ニ寫名あり少世ふ知リ小善ハ家
ノ名多キ也

○北尾政美

重政門弟

文化中没ス

俗称 三次郎

居 初小細町 後住吉町裏川岸
後於玉池ニ住ス

姓 鋏形氏

号 杉臯

後号 蕙齋

紹 真ト政

政美近世の名人あり邦學家の善き意を好て一家をあた東都の繪圖を
妻妾一ト眼ふる画不書事を工風して大ひ世人もそそり邦田中
みそ江戶強國の家をまじり法確の爲ふ多く強みかといふきおあ
おの画より近世強みかといふ人の善きあり是より世不唐粉色招の画
かちひふ流りも一厨の同人あり

畧画式 人物鳥獸山水
花鳥草木と六冊

蕙齋畧画

畧画苑
諸職画鑑

諸職繪手本

此外刻本多クアリ

後松平越前侯の藩中ふをりて板倉若市の強を止め鉞形紹真と政美
極をそま子赤と唱ふ今松越前侯の藩より門人ふ美丸とそりの所
おのりて政美の所まぬり多流をつむ画風の大小ふそあり豊國
う流あり名をそ強しそ及て強ふおそり

○喜多川歌磨

年中没ス

俗称勇助

居 始年慶橋 又久右エ門町
後馬喰町三町目

号 紫屋

何れお石燕豊房の門人して邦學家の画を学ぶ後一家をあて浮世繪中興始
祖の名人と唱ふあり男女の風俗流りを描くそ近世世人より強國の美
を極より自云生涯得者繪をうご戯場解あ胃あるも老若男女且つ原の役者
所是を画きて名を強し描き業あり何れ俳優の餘光を伝ふ我々日本
強國あり浮世繪一流を學せむ名を車強とてとてとありそ意ふ遠くはそ名
海内も同の一家傑とてと

因云長崎の人一法然の高艘より哥磨が名を知り多く強國を求
まり唐中をも同く浮世繪の名人あり此こそ画不書を以てり人此等
のありそ新體をわきりの強國をわきりわきりわきりわきりわきり
あふそわわきり三人狐火の強あり強國を同流の國をわきりわきり

を多かりくも存世の多かりて歎息を入るべしと云ふ病死を抄む

文化年中中興が岩城より来たものなり人浮世縁を好む一病なり元江戸の者ありしが業を極中とのを南に出世の如く能登ふ徳来をそ此江戸をその一陽高き雲の得志を志すは今遠く地は不徳といはる縁名人の奇磨と名のを知らぬ人の稀もあらずと云ふ流りの得志縁の白雨の降が如くを用ふ事のみありしと奇磨が言ふあり是れを知らず

後者縁ふ市川八重一世代おらん其人の相ををり時桂川の縁評判しておらん人ありし奇磨の美人縁のおらん其人の道場の縁をいし是ふ縁をより近世浮世縁かき蟻の如く運ひ出むるが如く趣を意く嘲々として今縁ふ人多く是なり

奇磨ふ門人多く浮世縁のふありは花巻虫奥写生のふ精巧細巻の粉雪

摺画亦多し人増奇縁多しといふも是れは其の初ふ進多しを浮世縁

類考同如奇磨通河町甚な屋敷に帝を云縁双張問の小寓居なりとあり

- 吉原年中行事 さいしき 摺 武冊 十返舎一九 和文入
- 繪本百千鳥 極彩巻 和文入
- 同 出 撰 極彩巻 和文入
- 同
- 同
- 同

その他枚挙をふいと多かりは業不記不あり

奇磨門人

- 菊磨 寛政日文化文政人 後月磨ト改 一流ヲ書キ板下画タニ草紙アリ 馬喰町ニ住ス

- 雪磨 門人 画ヲ止メ作者トナル 名高シ
- 美磨 門人 後北尾重政トナル 小川ト改哥川トナリ北尾ト改ム

式曆

俗称 小石川水道端ニ住ス
文化中没ス

秀曆

俗称 下谷柳橋荷前ニ住ス
錦繪アリ

歌曆

二代目 俗称 馬喰町ニ住ス 文化ヨリ天保ノ頃ノ人
志川春町ト云ヒ人ナリ書ヲ善ク故哥曆ガ母ニ入ラセシナリ

哥曆言々吉原年中行事ハ大ニ流行シテ作者十返舎一九云々吉原ノ事ヲ表
シテ中ノ文章亦ハ新奇ト云ヒルモ哥曆ハ繪担ノ事ヲ行キテト云フ所ニ
ちハシテ今命ヲありしヨリ中ノ事ハ是レモ其氣力能ク表スル事ニ大ニ力ヲ入
リテ其間 没ル事ヲ双珠河原云々所モ奇曆也ト云フ病死云々トモ其繪巻板
中ニ載ル事ヲ多クシテ其間ハ小画者ありガ如ク繪巻ニ入ラセ
ル事ありト云フ或ハ双珠河原ノ事ハ其ノ事ナリ

○歌川豊春

安永ヨリ天明 寛政享和文化ノ間
享年七十余オテ没ス

俗称 庄三郎 但馬産ト云 居

始芝三島町後日本橋
落髮シテ赤坂田町ニ住ス

号 一龍齋

江戸産也

其妻ハ如女 門人あり後流ルノ風俗ヲ画キ一家を著リ標芝居ノ看
板者ヲ加テリ 彩巻亦奇 寛政ノ日光山御修儀ニテ彼地教人語ヲ初
シテ其ハ浮世繪也ト云フ浮世画トモ稱ス如キ一 彩巻也ト云フ 彩巻ハ云々
浮世繪ヲ彩巻ト云フカキ也セリ 寛政ノ比ノウキ世繪ヲ結ルト云フ者
紙ノ敷ハ多ク如キヲカキテ其ノ事ナリ

豊春門人

後年豊春ト名ノリシモノアリ 血脈ノモカ文政ノ始ナリシ
其後ナシ京橋 銀座ニ下目 新道ニ住ス

豊廣

芝居門前ニ住ス
門人アリ 別ニニルス

七右工門

画カズ
本所御藏前ニ住ス

豊國

中橋横町川岸ニ住ス
門人多シ 別ニニルス

豊久

探町ニ住ス 芝居狂言本ヲカク
錦画アリ

豊丸

組上ニ燈籠ノ画ニ妙ヲ得タリ
錦画アリ

按ふち所法極の標世の看板は今の筆を分評判せし秘書國を
をうきしと云うそは書英も是ふ波て者らにきしものあり今も
徒が筆あり去るも一ち分りしとあり

○歌川豊廣

寛政ノ末ヨリ文政十二年ノ頃没ス

俗称 藤次郎 居 芝片門前町
号 一龍齋 江戸ノ産也

始の豊喜の門人あり、乃不儀書文席を好て三味せんを樂むむ妙子之後、
家の画風をあり筆玄雪舟或ハ明画の趣巧とも元より古依抄師の画風を
學ぶ筆筆の墨跡を極妙にして法文画とをむ妙之草紙紙融付續り以今より
始り初代南仙笑楚漢人作之世仍る後中野千部を画々画の筆力奇巧ハ
近き日時のありふる筆者あり、粉も画も妙多之門人多し

歌川豊廣

三涯役者画ヲカス浮世繪師ト云ヒ
粉色摺 江戸名所福茶番

實子 豊清

俗称 金藏 号 齋
豊清ハ學善ノ錦繪草紙讀本アリ
早世ス可憐

娘實子 女子

他ニ嫁ス

豊熊

俗称 熊吉
豊廣カニ實ノ孫ニ

門人 廣昌

駿州沼津宿太平某
錦画ニ三種アリ

廣重

武ハ代洲川岸住 文政ノ末ヨリ天保ノ今專画ヲ
近藤徳太郎 錦画 草紙多シ

廣恒

廣政

○歌川豊國

寛政享和文化文政年中没

俗称 熊吉 居 始芝三島町芳町堀江町
号 一陽齋 江戸芝三島町ノ産也
人形師ヲ業トスル人ノ男

始め老老の門人あり後英一様の画風を學び秘書國の筆意をとるそは浮世繪

玉山九徳多々画法を慕ひ一家の筆法を以て其の廣と所行の高可凡俗を
 寫す事少く妙を以て其の筆法を以て其の廣と所行の高可凡俗を
 也泉市ト云從者切画也美人繪并從者似款此今より行中其の祖と云々其の
 双紙合花讀本錦自數百部世々として其の一流の画風を以て其の祖と云々其の
 門人點々文以中没と

九十三
 一陽齋豊國
 直次郎不学画 板木師

二代目 龍齋豊國 俗稱豊國養子トナル本郷春木町ニ住ス
 初名國 歌川豊重ト改ム

初代豊國門弟
 二代目豊國門弟

國改	俗稱別記ニユル	國富	錦画アリ
國滿	俗稱熊藏 錦画繪双紙有 カコニヤヒモト 芝ロニ目田也ト	國魚	錦画双紙有 ニ三種ニスキズ
國長	俗稱別記ニユル	國景	
國丸	俗稱別記ニユル	國誌	

國次	俗稱幸藏 銀坐四町 錦画草双紙アリ
國安	俗稱別記ニユル
國貞	俗稱別記ニユル
國直	俗稱別記ニユル
國信	俗稱 作名志満山人ト云 画作ノ草双紙多シ
國芳	俗稱別記ニユル
國周	俗稱 繪アリ 早世
國虎	俗稱 余藏 草双紙錦画アリ多ク出ス
國宗	國長門人俗稱 錦画ニ三種アリ
國照	俗稱 惣右エ門 錦画ニ三種アリ
國房	俗稱 錦画ニ三種ヨミ本モアリ
國登女	俗稱 錦画アリ

此余多々ト云とも板下画不出者畧之

一陽齋筆画本彩色摺

画千本二 年玉筆

似顔獨替古

時世姿

後者 合鏡

三階興

同 此手柏

此人の傳多しと云とも姑く爰の畧を記す文化文政の同代人の似顔画大しむ行ふ爰ふ於て豊之丞筆塚碑

柳島妙見境内ナリ 山東京山樸文筆

或人曰豊國ハ其骨法豊廣ニ不及事遠シ画法劣ルト云モ流俗ノ眼ヲヨロコバシムル一妙ヲ得タリ 戯場流行ノ時ニ達シモノナリ 后年迄春画ハ不画シカ没故ニ三年前ヨリ教部ノ春画ヲ出セリ

○歌川國政

寛政ノ末ヨリ享和文化ノ始ノ人

俗称 甚助

奥會津ノ産

号 一壽齋

居 始ノ芳町 堀江町 后市ヶ谷 左内坂ニ住

豊國の門人あり其畧の事多し二代目由良と云おしむる後ふりたり云

板下をみえ何人か不知始見 餅屋を業とせし生質芝居を好め一二癖あり僅
此いよりのれい狂言をえぬをえより油をとり似優の面を似曾と画く甚妙
あり餅屋の主豊國と交り深うしりば其趣を物語るも豊國侍の招きく
かたむを似曾と云ふ面神の癖を似曾事曲のふ及事多し別需ふ
るして門人あり或付中山富之丞 世ニクニヤ富ト異名スの似顔を画く其人側ま
如く目あふるまの如くも改めら似顔羊角の面扇強流りも扇扇問答
是をり板下かうりむ巾中ふ喜多世人始めて面神の似るもの奇あきを
もせばや一針の利潤をゆりしふまよりして多く扇扇強を画くむ
師豊國をふるまうしりば其趣を以て規矩と云ふも
一時風流夥しりしに其趣を名大世ふ初まりし時豊國より似者画を改
め似曾と云ふも世に及て由政が門人ありんと云ふも後師画くも
多く由政が画道が深くふ入學所拙多し人物今くふ傳僅三は由政
此世終ふ其畧が筆力を學ぶべく世終れりあり其双紙繪本をふ画して

唐より後似顔の面を作ると童子の爲ふ美人より没ところをふ知

○法橋玉山

俗称

天明寛政享和文化ノ人
没年

大坂ノ人也

别号

修德

姓 岡田 叙法橋

近世板刻密畫の開祖多り始め 門人其後一家の画風を著述此
画尤多し画法筆力の秀才ある事亦此に数あり 津傳用之の妙筆云
巧三都の有出づるものあり 名譽 國會 繡像 浄土 移る所を画く 京本板
の板刻画の悉く之を一時的の高名ぬると云ふ

繪本太閤記

自初篇至七編大イニ
世三行レタリ

唐土名所番會

兼葭堂藏板勝レテ妙也

三國妖狐傳

繪本玉藻傳

同 同 同

その他枚舉是より其世を知る事あり門人多し

二代目玉山修徳文化文政の比江戸津田の位中より取り板りの画はう
さりし津田の津田が朝の圖を画きし 齋河初代玉山の画を修徳
ひ得るものあり

○法橋関月

俗称

天明寛政享和年中

大坂人也

姓 部

号

叙法橋

始め月岡丹下の門人也玉山が筆意画法を學ひ名傳圖繪を板り
せり仕自らして没せりと云

伊勢名所畠會
山海名産圖會

関月、実子、藤、関、牛、天保、中大坂、住、又

法橋中和
東野 姓大原

京師ノ人保元平治又前太平記源平盛衰記
等名所圖會ヲ画リ
此頂同時ノ人ト見ユ
大坂ノ人後奈良ニ住

○春曉齋

俗称
号

大坂ノ人
姓速見

年中ノ人

刻板之繪入、簿中を多く画り能く法橋玉心之画風を學ひしり
画 平泉実記 拾丹
同

○二代目春曉齋

俗称
号

大坂人

年中ノ人

後妻、咲、多、跡を継

○竹原春朝齋

俗称

京都ノ人

秋里、繁、高、と、文、り、深、く、五、義、内、及、瑞、由、く、多、義、國、命、の、別、を、多、く、也、り
三馬、按、春、朝、齋、男、春、泉、齋、り、継、テ、名、所、圖、會、ヲ、画、ク
杏花園、藏、淳、世、繪、類、ノ、附、録、ハ、白、銀、所、一、丁、目、維、名、屋、甚、屋、新、七、郎、教、書、と、ア
リ、甚、ブ、ガ、ン、ノ、物、ナ、リ、只、画、道、ニ、執、心、ノ、人、ニ、テ、心、ヲ、ホ、エ、ニ、見、聞、セ、シ、テ、ラ、シ、ル、ニ、タ
ル、モ、ト、見、ユ

○歌川國貞

文化二年 頃ヨリ天保ノ今ニ至ル

俗稱 庄五郎 居 本所五ツ目 後龜戸ニ住 武州葛飾郡西葛西領産

教号アリ

天保四年ヨリ 英一 蟬

樹園

國貞を本所五ツ目流し捕らへり依て五渡等の号あり
の頃より浮世画を好む所ありて後若狭を書き豊國門人といふ始て監本
を何れかふ浮世書を以て豊國といふなり
三三年、改の始め若狭の板を画す 山東山作始テノ作ナリ國貞始テノ
く錦繪之中村歌方の大板よりし 在東山作始テノ作ナリ國貞始テノ
歌右エ門カ目見ハ狂言テカハリ 板点を画す 馬喰町西村 團扇繪 歌右エ門カ目見ハ狂言テカハリ
十本橋古今マテルアタリナリ 板点を画す 馬喰町西村 團扇繪 歌右エ門カ目見ハ狂言テカハリ

画風をよく其の骨法を學びて後三流の筆を以て一盤高岩の
筆法を慕ふり所没之後自ら自立して浮世繪者似顔画小あき
なる部の合を若狭板を切り種布を二三款の色紙画く日本の絵を末也
を當世の風俗を写す妙なりと云ふあり画刻を學びてより當時の
名門人なり 委し傳へられぬ

- 繪本似顔夏の富士 日
- 似顔早稲多古 日
- 日
- 日
- 日
- 日

その他 牧草をふ道行らん

一 雄齋國貞

五尺五寸 貞虎 俗稱与之助 丑紙錦繪多く出せり

貞子不画学 貞房 俗稱 草紙出せり 女子 日 貞子

貞繁

俗称 双紙ヲ出セリ

貞秀

俗称 兼吉 双紙 錦繪等 多く出セリ

貞幸

錦画アリ

貞景

俗称 錦繪 草紙ヲ出セリ

按ふ近頃國貞ハ英一蝶の画ヲを用ゐるを以て五浪亭國貞と画名
を書き之ヲ押し英一蝶と稱する事少クヤ當時の南無為院と云人の門
入て存人の名跡を望む事少クヤ後者似流の浮世の似非ぬ画名を慕し
事あり

○歌川國長

文化ノ末ヨリ文政ニ没ス 四十余才

俗称

梅干之助

居

芝口三丁目 後新橋金古町

号

一雲齋

居

江戸産之

画を豊島ヨリ學び浮世繪を能く描き双紙ニ三種之細上紙を或ハ細キ細
物ハ細キ浮世繪多ク出たり其風ニ妙を以て浮世繪と号し名存の繪

多く阿蘭陀人ニ學ぶ事多クある下極下画をふり人々不遊之風
を樂もうとて若田の妙之酒席ニ興を添ふ事を能く一奇人と云
し根川善春亦幸あり一時の友人あり

○歌川國丸

文化ヨリ文政ノ末ニ没ス 年三十余

俗称

号 一口齋

居

始本町二丁目ニ住レ 後浮世小路ニ付ス

五彩樓

龍蝶庵

竜尾

能楷ノ名也

其人書畫を善く頻る才有り其風門人とあり西安と並ひ行る浮世
繪者画ともふ事一學双紙合を浮世畫多ク人々所之画法妙の風
畫をよくしりり亦風流の遊ハ法名家の交り深し能楷を以て
とも當世畫の門系あり

○歌川國芳

文政ヨリ天保ノ今ニ至ル

俗称孫三郎
号一勇齋

居 始白銀町二丁目後二面國
米沢町ニ住ス
江戸産也

豊國の門人あり文化の頃錦画二三種出シテ暫く止む文政の末より水滸傳百
八の錦画を出シ板元西國加賀
屋吉右工門大小の形を種繪する紙年々益々多し九徳亦々画
風を學ひ一流の筆法有り門人多し

扱ふ北亦々画風をも慕ふ近世茶画に桐板画の趣を基
とんといふ

○葛飾爲一

明和生レ寛政ヨリ享和文化文政
天保ノ今ニ至ル

俗称
姓氏

居 始本所横綱町数ヶ所ニ轉宅ス
今浅草寺前ニ住ス
江戸本所之産也

数号有改名左ニ記ス

始のハ業を傍川喜孝ふましく傍川喜朝と画名を承りて破門を以て叢

喜朝と号し古儀倉宗理の縁を繼ぎ二代目菱川宗理とあり其画風を以て

宗理ノ頂ハ狂言ノ摺
物多シ錦画ハカニ一派をあらん堤寺琳ノ
画凡ヲ慕フ亦門人宗二小宗理を譲り三代目
宗理ハ名を宗元

小的せり干叶寛政午の未爰少あり一派の画風を以て北齋辰政雷斗と以て

一説北辰妙見ヲ信ス故ニ北齋ト改メト云其頂ハ東都ニ明画ノ風大ニ行レ画心有モリハ
唐画ヲ學フ專ラ流行ス流俗ニ從ヒテ画風ヲ立ニ世ニ出ル時ナリ雷斗ノ画名ハ重信ニツル北齋流と号し

明画の筆法を以て浮世繪をあら古今唐画の筆意を以て画を工風せしを

北齋を以て開祖とを爰こゝろ世上の画家俗ニ云
本画師其画風を承りて世俗の趣を

承りてけやちを一時小行もその門人多く高名の妙を以てあり其筆意を繼ぎ

學べられを戯作の繪多し其多し學双紙の画作を板りて作名を以て可候と

号し叢春明ノ頂ハ役者ノ形繪を出リ北齋ニ似テ錦画の板下を画又狂言摺物画を多く
カケリ錦画凡あらしを以て表シ北齋ノ画風を用ヒ摺て弄巧ナシ画狂人号シ門人益々衆ニ板下ヲカキ

専ら画狂人葛飾北齋と画名して雷鳴を画風錦繪多し其双紙の尋常小行は

備像讀本の差画を多くかきし世の俗を繪入讀本人より大いふ趣あり此頂
画入

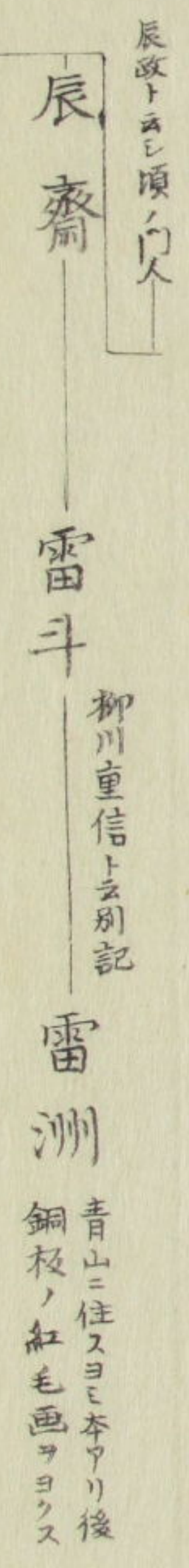
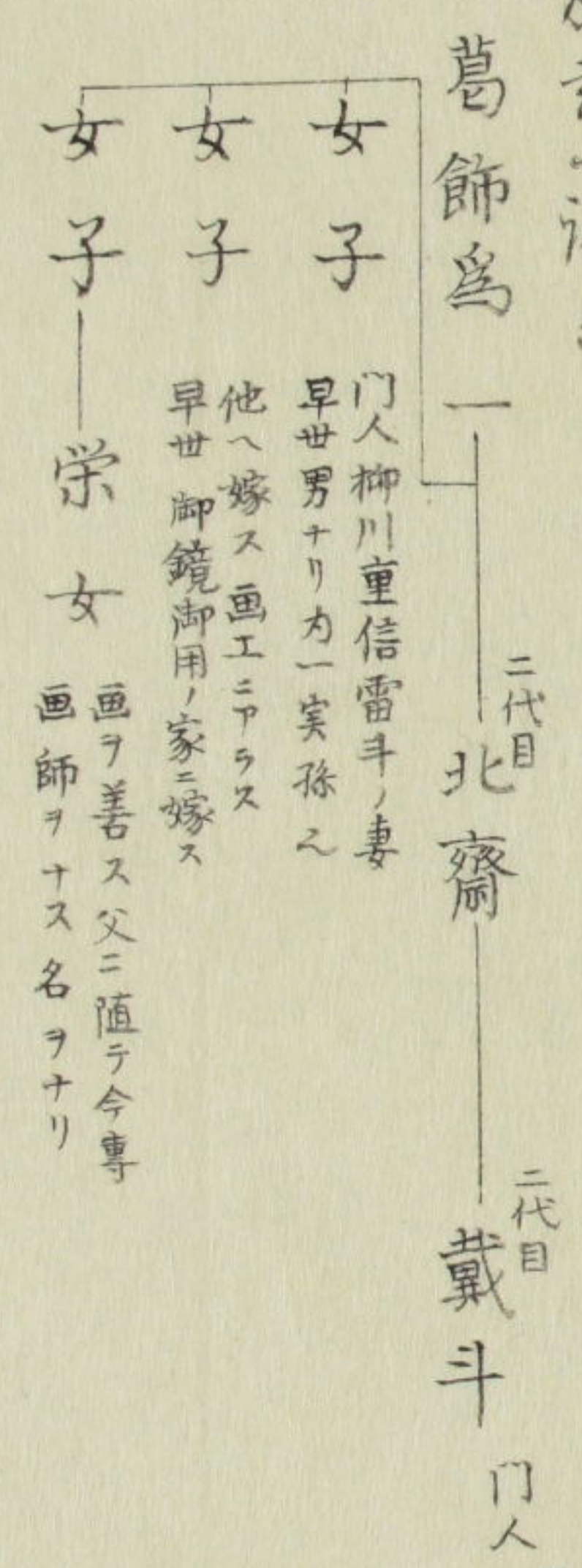
漢中世ニ流行ス画法草双紙ニ似ヨラスヲ以テ貴トス亦時ニアヘリ讀本画トテ別ニ杏花園藏書浮世
繪類考ニ北齋宗理ハ狂言摺物ノ画ニ名高シ淺草ニ住スヘテ摺物画ハ錦画ニ似サシク貴トスト云

京師大坂より雷名を慕ひ門人多く學ぶ者多し尾川名倉を始めとして
 高木氏を祖れども必親とて画家隨てなり板刻の巻画は此を以て當世の獨歩
 を極す初め利を極擧せしより以て淺画と題して画の妙を考ふるを大小世に仍
 る極其細をかせり 始極元江戸翻町角九屋甚脚あり一板布て后 再名を門人ニ譲りて後世
尾川名倉屋永樂屋東四郎 藏板と云なり
 舎戴斗と爲あり 是をも文化の末門人北白浪と云へて前北白浪一
弘ノ書画會アリ大画ハ其間四方十間 四方名古屋ニテハ秋田出山ノ番ヨカリ
 と改名を門人の臨本を考ふる道は以て画の妙を是ハ爲二板刻して致十冊
 を世に傳へし生涯の面目ハ画風分蘊と云ふなり 山城先を於て席巻
 上流初め何れも時代の画法妙ものと云ふなり

- 板刻画手本標目
- 北齋漫画 自初篇 至十三篇
- 戴斗画譜
- 北齋画鏡
- 柳 雛形
- 地文 雛形
- 画本 獨枕昔古

- 同 画叢
- 一筆画譜
- 爲一画譜
- 北齋写真画譜
- 画本 獨枕昔古
- 画本 早引
- 三體画譜

画の本形初め極擧せしより以て淺画と云ふは此を以て當世の獨歩
 あり初め利を極擧せしより以て淺画と云ふは此を以て當世の獨歩



北馬 狂奇摺物多シ別記アリ
 画入ヨミ本殺十冊ヲカケリ後一家之画風ヲナス
 蹄齋ト云下谷
 三スシ町ニ住ス

北壽 両国ヤゲンホリニ住ス
 錦画山水ノ遠景多シ

北溪 別記アリ赤坂ニ住ス
 スリ物ヨミ本多シ

北岱山 浅草ニ住ス
 スリ物ヨミ本多シ

北鷲 スリ物多シヨミ本アリ

北嵩 本郷ニ住ス
 ヨミ本神双依多シ后唐画師トナル

北雲 大久保五郎トアリ
 スリ物錦画ニ三種アリ画本アリ

北泉 別記ス
 ヨミ本画本多シ

北 大坂ノ人
 画譜アリ

墨僊 各古屋ノ産
 画本ヲ出ス
 北洲 大坂ノ産
 錦画ヨミ本アリ

子化移代人板刻の画をかろく我々のを定ふ載を以て志を定む僅小刻
 印をあらしくを洩すものあり

傳小曰為一分ハ曲画を善を
 外玉子德利管スベテ蓄械ニ墨ヲツケテ画ヲナス左筆モ妙アリ下
 ヲリ上ハ書ヲ上アル逆画ヲカケリ中ニモ凡ニ墨ヲスクヒカク画ハス
 △刻本ノ春画ヲヨクカケリ一流ノ風アリテ情深シ 彩色小一家の工風をあらして一流
 の妙を移めり 総て善画ハ画法充満し 一人を以て一門の殿君も画をなす
 色と墨とのあり 移代の名人あり 倭漢の画法不変し 首法自分宗明此
 筆を所て 尋常の画風不変し 何れを生かすも一家の筆法画躰
 悉く是ととも能く其生かす所あり 狩野流ニテモ 凡テ似サルヲ画法ノ第一トス 自分云
 私年法流の画家ハ其首法ヲ得て一流の筆法画送の如く筆をらるる
 得とせざる事ありと云り 香具師の看板画より 戯坊操の看板油画蘭画

○柳川重信

文化文政ヨリ天保三年ニ没ス年卅余

俗称 本姓鈴木氏男

江戸ノ人也

号 雷斗

居 始 本所柳川町
后 根岸大塚村

北条の門に入る画法を多く北条の娘を娶く聲とあり雷斗の名を續て
始ノ居ヲ本所柳川町ニ在シニハ
柳川以テ姓氏ノ如クニセリ 板刺の密画小ぬらみあり流の密法をよくせし一流の風
意を書り彩色画ハ東風大花女あり流意の玉ひり筆法を慕ひ亦國員
の浮世繪を似せりその双紙を多く画り
柳亭種彦初テ作 重信始テ画京
一番娘羽板 西村与ハ板文化五年比ナリ 續也も
出せり 柳亭始テ作奴ノ小マン神文字手摺叙
山崎平ハト云 書林板本 昔人形
その双紙續也とも小大ふ世ふれを數千
額を貴帝ハ一家をあり世ふ重信流を多く流意より用られり
僅りして浮世を多く人形體立の製作も善巧ありしと南嶺のその画
の筆法を画り天保三年十月没す門人その流意を多く世ふをせり
揚々重信の所重信の聲とあり馬込の作の侯宮傳ニ篇五ノ卷ニ
未二丁中流病ありし時重信の流意を画りしあり
初書師ハ英泉画ナリ父傳
重信英泉兩画ナリ

その他續本所彩も揚々て流げまると云画本あり

類訂 衆星閣 角九屋甚助
小枝 繁宗翁作ナリ

○菊川英山

文化文政ノ比

俗称 為五郎

市谷ノ産 居 麹町ニ住

号 重九齋

名 俊信

始め父英二小業を學びしり
英二ハ狩野流ノ門人東舎ト云人門ナリ板刺ノ画ハカニス
菊川一家ノ浮世 繪師ニ造リ花ヲ業トス近江屋ト云北溪ニ
幼年より友ありし其子画法を慕ひ北條の画をかたり古哥磨没せり
後自立して哥磨の画風を似せり一家をあり板刺の美人画をせり大
ひふ世ふれあり豊國春扇と並ひれもて浮世美人強中興一家の
祖とあり始り後者強も書り
文化三四年ノ頃堀江町ノ團扇同屋故有テ悉ク豊國ノ
新板繪ヲ不出一年英山ノ役者画ノ團扇バカリ出せり
アリ其翌年ノ頃ヨリ國貞モハシメテ哥右工門カ猿田シノ与次郎ノ画ノウナハラカキナリ夫ヨリウナハ画
筆ニ英山ハ役者ヲヤメテカズ美人画ヲ多ク出セリ國貞ヨリニ三年モ早ク世ニ行レタリ錦画麴町三河屋
清左工門ト云繪双紙同屋板元ニテ始メテ英山ノ画ヲ出シ大イニ
役者画ハ豊國美人画ハ
賣レシト云哥磨没シテ美人画絶タリ時ニ逢シモノナリ
豊國ノ役者画ノ上表紙ニ陽齋ノ画像ヲ英山画シ英山ノ画ニ豊國寄合畫
等アリ交深クタガヒニ懇意ナリシカバ諸族方ヘモ二人ツ、席画ニモ出結地彩色
英山と並ひれも

画二兩人へ命セラレタリ年ノ字年菊ノ字菊紙物烟草入ナド一
 ナラミ付タルヲ持テ現ニ住リ葉山ノ南嶺ノ人ナリ能ク写意ヲ學ベリ 竹塚東子作
 大鷄塚板元西村是ハシメナリ 三馬作
 橋本徳親作ニ三年續テ出セリ 續ハハ画美人浮世風俗ハ狂之振と云似ヤリ
 小當付此風俗をうき遠國とも名をき一時の所あり 浮世ハ狂者同板
 子世不知之文政の末より業ふ度まで往く極むを不画門人多し
 菊川流と改む

菊川英山門

英章

英泉

別記ス

英里

英信

スリモノ画多シ
安五郎

光一英章

春画本アリ
狂言作者ナリ名章三

英蝶

スリモノ画アリ

其外數十人可とも板別の画をうきものあり

因こ云英ハ画才ありとも 濠洲も双紙を画く事少く是跡 十返
 舎九作の負福備のこゝろハハ画ありとも双紙も徳親作の津川

頭巾と云一双紙の画を豊國の人物の中ハ自己ガ女画を云ハ一
 頃評判もよかりしハ北島も是ハ倣て画一も双紙よき多し
 ありあり

○英泉

文化文政ヨリ天保ニイタル

俗称 善治郎 后里介

居住

江戸敷子所ニ轉宅シテ住所不定
始番町 后根岸 新田村

姓 藤原 本姓 池田氏

名 義信 一 茂義

号 溪齋 一 号 一筆庵

别号 名 公羽

可候

戯作ノ名ナリ 戯作ノ平双紙中本
春画本等アリ

始め幼年の頃 狩野白桂齋の門人とありて 画を學ぶ
 後 狩野榮川法印ノ高弟ニ
 國春様又 青雲志以て 仕度ハ在りしハ
 北亭ト云リ

此の如くして流俗を流来宋明の好む書を讀の一癖ありて通宵紙
 を書きたる戯作を樂みとして近世の双紙中本者画好むを多く
 出たり 薄彩を摺り春画ニ似たり 画作、枕又庫勝と行レタリ 考付流りの流俗、儂て浮世美人像を多く
 書き一付ふ大ひふ世を初まてより北高嶺の画風を慕ひ画別骨法を以て
 後一家を以て青楼 新書原 遊女の姿を寫さふありて其家の風俗襖姿
 を画し、流俗の相を極し似をも時世の形神を新し不画し是は不盡れ
 早近頃國貞も傾城画の英泉の寫意に似て画し者之役所画さる
 を浮世流俗の双紙を慕ふこと自ら其双紙合を中如續像讀中本千
 部を画し人僅文化の末より其流の多大ひのひを多れとも筆をも其の讀
 本流画影板別を 國貞画モ多し世藍摺、 流画此人ノ工風ヨリ流行ス 高天坂の書肆より讀本多く出
 板も三都の別本を江戸の在傳して画し北高嶺と其の之門人も多く有りし

浮世画譜

画千本 尾州名古屋本町二丁目書林
 自初篇至十篇 東壁堂 永樂屋東四郎板
 美人画ノ画則ニ 江戸書肆合刺

錦袋画叢

諸職人画本本

大坂心齋橋博郎町北へ入
 群玉堂河内屋茂兵工板
 馬喰町二丁目
 西村屋与八永壽堂板
 芝神明前耳泉堂
 和泉屋市女工板

繪本初心画譜

画本

此化形本下板本を以て近頃の流俗を以て

溪齋英泉門人

初春川五七門人

京ノ人之在江戸住ス
草双紙錦画ナリ

英春

俗稱 大木氏
小石川 春画錦画多シ

英笑

米花齋

俗稱 源二郎
麩町

中本讀本ニ多ク出セリ

英壽

俗稱 伊三郎

草双紙錦画多クナリ
浪花ニ在住シテ名ヲ改ム

泉晁

俗稱 吉藏
灵岸島

草双紙錦画多クナリ

泉橘

俗稱 仙吉
向島

中本多ク画作ヲ出ツ
筆耕ヲ業トス

泉隣

俗稱 井村氏
桜田

中本サシエアリ

紫領齋

貞齋

菴齋 泉里

俗称 弥吉 藤町

中本サレ画アリ

板刻の画を以てする者ありのを以て英の字を画く名とする浮世繪影
可英の門人を混同を一時の人あれを之
是ヨリ漢文

畧傳云一葦庵英泉ハ星岡の産也父母存在の中を遠不出

父ハ池田茂晴 後山不言齋

ノ門人ニテ書ヲ能ス讀書ヲ好ミ能器を嗜ミテ家

母ハ泉六才之時没を継母アリ

ハ更モ心ヲ以テ双記ハ仕テ有るあり尤家ヲ負ヘテ其文化の始メ父

ハ反没一母ハ其没ヲ知キ妹之ヲ書ク其母也一其母の古蹟あり

流浪の人とあり水野家ニ血縁多ク一其母を以テ其母の古蹟あり

新志を以テ浮世繪師とあり戯曲狂言作者初代藤田金造

右並本 此門人入代田十市の名を續々作者とありシカ再画工菊川英

ニゴ家ニ寓居ス 英ニハ英山ノ其比英山実父ナリ行レテ諸侯ノ召ニ應シ彩色画多クア

出セシヨリ是ヲ名トス英山 リシカ肥州侯命セラレ門人不残ノ画ヲ集玉フ其列ニ入テ英泉ト画名ヲシルシ

門人ト云フ始ナリ

より名を不好飄々として住所を不定跡なき如く

風を画キ羽子板帳物を彩リ需上流を稱するあり 此頃風を画クモノハ

一日二百文ナリシカ

英泉七女五トツ取シナリ 是ヨリ以後他人モ今ニ至テ

三女ト定リシト云職分筆ノ達者ノ人ハ二人分ラナス 板刻の画を半知りて其所を

知ルを貴客迷惑して其所を尋ルハ娼門酒樓ノ處ニ死スルヤヤシ

漸ク其母を画ク是を以テ其金持の流ルハ破産六名圖と云一魚同屋

有 是後ニ巴尾仁無エ 此人は来錦繪主ハ板元を業とす其母を好む

取ル泉を撰ルテ家ハ其泉衣敷を借ルテ其母を以テ其母を以テ其母を以テ

所を知ル其母ハ人の衣敷を浴衣の撰ルテ其母を以テ其母を以テ其母を以テ

生あり蝶と云ふ其母を以テ其母を以テ其母を以テ其母を以テ其母を以テ

を以テ其母を以テ其母を以テ其母を以テ其母を以テ其母を以テ

郡山池田氏ノ苗家 加る放蕩無頼の人と云ふも其母を以テ其母を以テ其母を以テ

少程を不用家ニ淫雅を思フテ其母を以テ其母を以テ其母を以テ其母を以テ

親族他人ノ重宝を以テ其母を以テ其母を以テ其母を以テ其母を以テ

其母を以テ其母を以テ其母を以テ其母を以テ其母を以テ其母を以テ

其母を以テ其母を以テ其母を以テ其母を以テ其母を以テ其母を以テ

其母を以テ其母を以テ其母を以テ其母を以テ其母を以テ其母を以テ

其母を以テ其母を以テ其母を以テ其母を以テ其母を以テ其母を以テ

其母を以テ其母を以テ其母を以テ其母を以テ其母を以テ其母を以テ

其母を以テ其母を以テ其母を以テ其母を以テ其母を以テ其母を以テ

如くふくふのそと後妻をむく子そふ由ふ一女子をそふは是より後
 人ふゆりて板別の繪ふ積を相り物在不寐屋門かふ不出捨を案
 年のる彫刻書書の強奉強強衆人へ積をく業をる事數く世
 小數事は案をわたり一家をあり門人を多くして業とをく
 苦心して志をこめて道徳と云ふ因り是ふ記を

○後藤茂右衛門

彫物大工

文化文政天保ノ今ニ至ル

雪且ノ子 聖旦

神田

俳名 五樂

江戸ノ人也

始の狩野家の門人あり雪舟の画風を學ひて一家をあら 浮世強くあり
 江と云とも一傑の画風をうき或は唐画の筆意も能く 長谷川等
 伯 始久六 叙法眼 始狩野氏門人之后自立シテ自ラ 久藏等伯 信春子等伯
 宗也子 等的 等林 等晚 宗宅 等作 等伯ノ門人ナレバ画風 各異ナリ因テ云雪舟ハ

僧ニシテ姓氏ナレ雲谷ハ寺ノ名ナリ是ヨリ称号トシテ門人ニ云ヘシナリ長谷川モ
 画法筆意似タルユヘ雲谷氏ニ雪舟ノ裔ナリト混同シテ后サニ誤ルモノナリ 是等の画
 齋を續くものあり 画法一家をあら板別の繪亦多し
 江戸名所圖會繪を能く画り物強く筆の物亦多く画り
 一派の名もあり

雪且 — 男 雪聖ヨリ

按ふふ京都の雪舟の画齋と稱するもの多し 川島雪亭 田安侯ノ画師ナリ 雪舟画孫ナリ雪
 舟ト少シ異ナレトモ名手之寛政 天明寛政ノ頃ノ人也
 頃ヨリ天保ノ今ニ至テ存ス 亦櫻川秋山と云人あり 雪舟ノ画孫ト稱ス 本郷
 小任を 画則モ冊ヲ板刻シテ 画鑰ヲ出セリ 長が侯の之藩中の雲谷の画齋より 雪舟ハ不
 画名と云ふ町繪師の堤等琳と云ふの何り雪舟十三世の画齋と稱ス
 画法大いふ異ありふし記を各混同して誤傳ふそふ流あり雪舟 雲谷軒 等揚
 流の画を甚くふり自りてそ画齋と稱を元祖雪舟
 梯代の名ありまのそ英名を慕ふそふ 類族多きものあり
 佛家ニヤモスレハ空海ノ作佛惠心ノ作佛ト云ヲ如シ仏師ノ業トセサレハサマテ世ニカフヘキ
 イハレハナカラシ名所古跡ニ義家カ守本尊手植ノ松頼朝ガ腰掛石ナト人ノ知高名ノ人

ヲ以テナツクルカ
如シ類ナラン
此雪且翁ハ一派の妙ニあり傳局宗達光琳の筆意ニ
倣ふて画しよもの可り明画神小写し山水ありと云ふ事善きを
播て画くハ名人の所為あり浮世画の列をよもの可り此と云ふ板
刻の画多くあれハ姑く多載して法格ある極の教ありと云ふ

泉守一

俗称 吉兵衛 泉氏

号 壽春亭

目吉ト称ス

寛政享和文化中没
五十余才
居本郷一丁目

江戸産也

俗中渾名也

始の古等琳の門人也后狩野探信門人とあり守の字をゆきし町画不
可憐の名筆之或者画を善くしよ又ハ泉義信と云ふ狩野流の門人
也画工ありし俗稱の目吉を以て画名と云ふ本郷の一侠客たり能狩野流
の画法を學ひよる流の雲龍鐘樓の跡ハ妙をひきり戯れハ極也画花

色の圓扇画等をゆきり泉吉兵衛ハ諸社ハ善法ハ修良彩色御用
を勤む日老又能山 江戸西山類町繪流人の顔あり齋後傳名ハ 傍負あり親吉之樹より二代勤む
三代目吉兵衛ハ門人林之助ト云し者之
美子聲女ニテ相續ヌ業ヲ勤ム 生涯名を不好画し額子子檢現為親の圖
有本郷弓町天神の社額ハ五布時宗の額なり海島天神の童子姓
ハの圖ありし是ハ教ありと化多し門人ハ泉鉄ト云号壽川と云と云
能所の画風を學ひしり

○櫻 等琳

号 深川齋

江戸ノ産也
叙法稿

二代目等琳の門人あり雪舟十三世の画を圖と稱す一家の画風善法を自
立して雪舟流の町画工を興りしハ元祖等琳を以て祖と云ふ事天
の以て此画風事中小しきハ快画為親の繪燈籠ハ此画風をよしと云



